

東京都指定無形民俗文化財（民俗技術）

メカイ

里山の自然を守る活動



八王子市立横山中学校 1 年

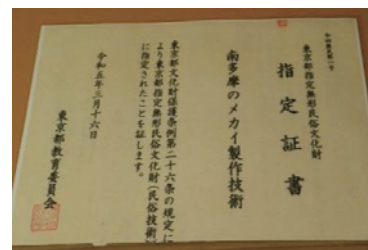
中本 慧

目 次

はじめに	1
第1章 メカイとは何か	1
1. メカイの部位	2
2. メカイの種類	2
第2章 メカイの歴史	4
1. メカイの誕生と広がり	4
2. 昔の農家の副業	5
3. メカイ作りにおける女性の役割	6
4. メカイの衰退	7
第3章 メカイの材料	7
1. シノ（篠竹、アズマネザサ）	7
2. 笹と竹の違い	8
3. ヘネ	9
コラム パンダ	11
第4章 里山農業クラブと八王子由木メカイの会の活動	11
1. ユギ・ファーマーズクラブ	11
2. 里山農業クラブの誕生	12
3. 八王子由木メカイの会の誕生	13
コラム 資源循環型農業	14
第5章 宇津貫のメカイ	16
1. メカイの発祥の地：宇津貫	16
2. 宇津貫の人たちの証言	16
3. みなみ野ニュータウン開発とメカイ作りの衰退	17
4. 宇津貫でのメカイの保存・普及活動	17
5. 宇津貫みどりの会の活動	18
6. ふるさと資料室	19
第6章 多摩のメカイ	20
1. 多摩のメカイ	20
2. 多摩めかいの会	21
コラム 「多摩ニュータウン」の開発	22
第7章 東京都の文化財指定基準	22
第8章 メカイ作りの取材	23
1. シノ（篠竹、アズマネザサ）について	24
2. シノを伐る（きる）	24
3. ヘネを作る・ヘネを編む	25
4. 柚木さんから聞いた話	29
コラム 長池公園	30
1. 長池公園とは何か	30
2. 長池公園の歴史	31
第9章 メカイの今後	32
1. 「東京都指定無形民俗文化財（民俗技術）」に指定されて	32
2. メカイ製作技術を伝承するために	33
3. 八王子の2つの伝統文化	35
4. メカイ技術が後世に伝わっていくために	36
あとがき	40
注	41
引用・参考文献一覧	49

はじめに

この研究を行おうと思ったきっかけは、2022 年度と 2023 年度の八王子環境フェスティバル¹で、「八王子由木メカイの会」が出展（2022 年度は「東部地区環境市民会議」として出展）していて、そこで材料の細い竹ひごを編む作業を教わったことだ。また、そこでは、メカイは里山と深く関係していることがわかった。



左: 2022 年の八王子環境フェスティバル、中: 2023 年の八王子環境フェスティバル

右: 長池公園自然館に掲示されている「東京都指定無形民俗文化財 指定証書」2023 年 7 月 31 日撮影

実は、東京都教育委員会が、東京都文化財保護審議会に、メカイ技術などを「文化財」として指定するのにふさわしいかどうか、検討してほしい」と、2022 年 12 月 28 日に依頼していた。そして、2023 年 2 月 15 日に、審議会がそれらのものを文化財として指定すべきだと答申し、3 月 2 日（長池公園自然館に掲示されている「指定証書」の日付は 3 月 16 日、上の写真を参照）に東京都教育委員会が正式に指定したのだ。² 八王子市のプレスリリースには、次のように書かれている。

メカイは、製作地の農家では日常生活用具として重宝されたほか、都市部の商店や料亭に出荷・販売することを目的として冬の農閑期に大量生産され、農家の貴重な現金収入源だった。また、高度経済成長期以前の人々の生活に欠かせなかった里山を維持するために伐採する必要がある篠竹を再利用して製作される。都民の生活文化の特色を示す民俗技術として貴重な文化財である。³

だから、ぼくはメカイや里山に興味を持った。

2 度目の 2023 年に行ったとき、「たしか、去年も来ましたよね」と声をかけてくださった方がいた。八王子由木メカイの会の方がぼくのことを覚えていてくださった。このことがきっかけとなり、八王子由木メカイの会の共同代表の塩谷暢生（しおや・のぶお）さんと柚木駿一（ゆのき・しゅんいち）さんと知り合い、実際にメカイの作り方を教えてもらう機会ができた（第 8 章を参照）。

第 1 章 メカイとは何か

メカイ（目籠・めかご）とは、「自生するシノ（標準名アズマネザサ）を材料とし、目を粗く編んだ籠（笊）のことで、当地方（注：八王子市・多摩市・日野市・町田市・稲城市にまたがる南多摩地域）ではメケエあるいはメカイなどと呼ばれていた」¹ ものである。この研究では「メカイ」という名称を用いる。「メカイ」が「メケエ」になるのは、「でかい」が「でけえ」になるのと、発音（母音）が同じだ。

「メケエづくりは（中略）田畑の仕事のすくない十、十一月頃から、翌年の三月いっぱい」² の農閑期に（注：農家の）「副業」として作られていた（第 2 章 2. を参照）。

1. メカイの部位

メカイを作るにあたっては、用語がたくさんある。³ それぞれの箇所ごとに働きが違うからだ。

メインの材料は「ヘネ」という、竹ひご（厳密には笹）だ（第3章を参照）。この竹ひごを使って、メカイの「ソコ（底）」を編む。そして、「底の部分を編む作業を『そこふみ』とか『しきふみ』」⁴ という。「ソコフミ」の「踏む」について、佐藤広『八王子の民俗』では、「編むことを、フムといった。」（p. 46）と書かれている。一方、『メカイの作り方』では、「大きなものを編む場合、膝で踏みながら編んだのでこのような呼び名になったものと思われる。」（p. 25）と書かれている。

メカイの側面⁵ は、ソコのヘネの端を立ち上げて作る。そして、横向きにヘネを交差させる。これが「ヨコマワシ（横廻し）」という作業だ。立ち上げたヘネの上に「フチマキ（縁巻き）」用のヘネを巻く。縁の内側を「ウチブチ（内縁）」、外側を「ソトブチ（外縁）」という。外側に芯（フチマワシともいう；ヘネガラでできている）を当て、フチマキ用のヘネで2目につき2回ずつ、合計6回巻いて、芯が見えないようにする。フチマキ用のヘネは、長くて幅があり、しかも肉（身、実ともいう；内側の部分）⁶ をきれいに削る必要があるため作業が大変である。また、緩まないように強く巻くため力が必要な作業だ。⁷ 大きなメカイの場合、「両側に芯を入れる」⁸ ことがある。

一応、これで完成にはなるが、さらに補強するために、「スジイレ（筋入れ）」という作業をする。竹で作った「竹ベネ」（「力骨」「力竹」ともいう）を3本、「*」型に交差させてソコに差し込み、端をメカイの側面に沿って90度曲げる。

最後に、側面とソコが曲がっているところに、芯を当てながら「シリカガリ（尻かがり）」（「シリッカガリ」、「ケツマキ」ともいう）という、ヘネを巻く作業をして完成だ。

ここまで完成していないもの、つまり、ソコフミをした部分の端のヘネが上に飛び出ている状態のメカイを、「ハザル（端笹）」という。「ソコフミ（底編み）、ヨコマワシ（胴編み）まで済み、フチマキ（縁巻）がされていない」ものだ。⁹

2. メカイの種類¹⁰

メカイには、いくつか種類がある。

「オオヒラ（大平）」は、長径24cm、「チュウヒラ（中平）」は長径21cmだ。この2つは、台所用品や農作物などの入れ物で、雑物¹¹ といわれる。「ヒトッコレ」（メカイを束にしたもの）として出荷するときは、60枚で1つのヒトッコレとなる。それぞれ、「オオヒラメズ」「チュウヒラメズ」とも呼ばれていた。「ヒラメズ」とは、「平たい目詰みの笹」の略である。おそらく、「ズ」は、ザルの「ザ」が変化したものだろう。大塚、東中野、堀之内、松木、別所、越野と、多くの地域で作られていた（第2章の「メカイ技術の広がり」図を参照）。



2023 八王子環境フェスティバル「八王子由木メカイの会」会場に展示されていた「ヒトッコレ」

「ジョウメズ（上目津）」という上物、つまり上等のメカイは、大きい順に「親（おや）」「中（なか）」「子（こ）」があり、親はタテベネの数が 24 本、中は 22 本、子は 20 本である。ジョウメズは、「上物目詰み平箆」の略である。ジョウメズは上等のメカイなので、「細巾で厚さの薄いヘネ（ヒゴのこと）を用いて、編目の大きさを細かく仕上げた」¹² そうだ。ジョウメズも、台所用品や農作物などの入れ物として使われていた。20 組で 1 つのヒトツコレとなる。小野路（現在の町田市の一部）や落合地区で作られていた。

「コバシラ（小柱）」という上物も、親、中、子に分かれていて、それぞれ 22 本、20 本、18 本である。様々な入れ物として使われていた。昭和初期までは 5 つ組だった。10 組で 1 つのヒトツコレとなる。堀之内の寺沢や、落合の青木葉というところで作られていた。

「ヒラダイ（平台）」には、尺 5 寸、尺 4 寸、尺 3 寸、尺 2 寸、尺 1 寸、尺、9 寸、八寸代用という種類がある。順に、長径 45 cm、42 cm、39 cm、36 cm、33 cm、30 cm、27 cm、25～26 cm だ。主に、魚屋で魚を入れたりするのに使用したため、北海道からの注文が多かった。尺から尺 5 寸までは 30 枚で 1 つのヒトツコレ、9 寸は 40 枚で 1 つのヒトツコレとなる。八寸代用は、40 枚で 1 つのヒトツコレで、オオヒラの大きいものをヒラダイの 9 寸として売る。北海道からの注文書に「平台の八寸代用」と書いてあったので、この名前がついている。小野路の別所や、小山田（現在の八王子市の一部）の別所で作られた。

「尺六の深（しゃくろくのふか）」は長径 48 cm で、東京築地の魚河岸ではんぺんを入れるのに使用したため、別名、「はんぺんざる」ともいう。30 枚で 1 つのヒトツコレとなる。別所や乞田（こった）で作られていた。

「四升（ししょう）」は、長径 42 cm、「五升（ごしょう）」は、長径 45 cm で、どちらも農作物（野菜）の入れ物として使われてきた。

「ダイダイ（大々）」も、農作物（野菜）の入れ物として使われてきた（大きさは資料に書かれていないためわからない）。縁のヘネは、他のメカイと反対向きに巻かれている。

「四升」「五升」「大々」は、いずれも宇津貫で作られてきたものだが、大きいため量産できず、戦後も少々注文があったが、ほとんど出荷できなかったようだ。

「むきみ」というメカイには、尺 2 寸、尺 1 寸、尺、9 寸の 4 種類がある。それぞれ、長径 36 cm、33 cm、30 cm、27 cm だ。築地の魚河岸や各地の料理店で貝類などを洗ったり、入れたりする時に使用されていた。15 枚で 1 つのヒトツコレとなる。主に、落合や別所で作られていた。

「ジョウボシ（上星）」は、直径一尺くらいの大きな平箆で、高さも四寸と高い。「星」とは「目の粗いことを示すとされ」¹³ ている。中に里芋や野菜などを入れて洗うなど、使い方が激しいので、「補強のために力骨、尻カガリ、中カガリをする」¹⁴ のだ。そのため、材料が多くなり、手間がかかるので、単価は高い。

「チュウボシ（中星）」には、親、中、子がある。コバシラの大きいバージョン（それぞれの大きさは不明）で、荒っぽく、雑物として扱われてきたため、戦後はあまり売れず作る人もいなかった。それまでは、落合や別所で作られていた。10 組で 1 つのヒトツコレとなる。

「桑振り（篩）（くわふるい）」は、大目と小目（それぞれ大きさは不明）があり、養蚕用具である。蚕（かいこ）に桑の葉を与える時に使用する。蚕の大きさによって桑の葉の大きさも違うため、大目と小目の 2 種類があった。

「粃糠篩（もみぬかふるい）」は、別名「焼糠篩（やきぬかふるい）」ともいわれていた養蚕用具だ。糠穀（もみがら）を焼いて黒くなったもの（焼糠）¹⁵ をイビラ¹⁶ の上に均等に振り播く時に使用された。

「糸すくい（別名「繭すくい」）」は、繭の糸取りの時に、鍋の湯を取り換えるので、繭をすくい取る時に使う養蚕用具だ。

「茶敷き（別名「こ敷き」）は、製茶で青葉を蒸す時に使用する。幅は尺1寸と尺2寸の2種類がある。『多摩市史 民俗編』（以下、『多摩市史』と略す）には、「主に三月は静岡県からの茶敷、四月、五月は埼玉県の川越、所沢からの茶敷の注文が増えた」（p. 174）と書かれている。静岡茶や狭山茶の生産で使用されたことがわかる。

「煮上げ敷き」は、別名「敷きざる」ともいう。メカイができる半製品、つまり未完成のもので、料理屋などで魚の形をくずさないように大鍋に敷いて使用した。タテベネの数が22～32本まで2本ずつ増えて6種類あり、1把10枚単位で出荷されていた。主に、宇津貫で作られていた（第5章6.の写真を参照）。

「コダマ（小玉）」は、長径6～9cm、深さ6cmと、小さくて深い小箆だ。料理屋で食べ物を小出しする時や、蕎麦屋で薬味を入れる時などに使用された。

「大メカイ」は、八百屋で野菜の運搬などに使用されたメカイだ。

このように、種類によって用途は違うが、多くは売り物、つまり商品として出されている。商品として出荷していたことは、縄やむしろ、絹などと同じだ。

また、「12月の下旬頃になると（中略）築地に買い付けにくる魚屋が年始のお年玉用に買っていくので、それを見込んで多量の注文があった」¹⁷ そうである。商品としてのメカイ（そのうち、オオヒラやチュウヒラなどの雑物）の大きな特徴として、メカイがお歳暮や年賀用品として出荷されていたことがあげられる。新しい年には、新しいものを使ったほうが縁起がよい。門松も、青い竹が使われている。だから、メカイの材料のヘネは、青いほうが使われていた。「当地（注：由木地区）のメカイは主に正月の年賀用として使われ、青い方が好まれた」¹⁸ のだ。年末はメカイ作りの書き入れ時だったのだ。

「桑振り」「粃糠篩」「糸すくい」という養蚕のためのメカイが作られていたことからわかるように、実は、メカイは八王子の伝統産業である養蚕と直接つながっていたのだ。八王子が「桑都」といわれているぐらい、養蚕は有名だ。一方で、メカイはほとんど知られていない。2023年3月に東京都の文化財として指定されたことで、どのくらいの注目を集めるかどうかが、今後のメカイの存続に関わってくると思う（第9章を参照）。

第2章 メカイの歴史

1. メカイの誕生と広がり

メカイの正確な起源はわかっていないが、「副業としての目籠作りは、文化年間（一八〇四～一八一七）のころ宇津貫村（現八王子市みなみ野・兵衛付近）で発祥した」¹ と言われている。

八王子市小比企町の「磯沼家文書」に、1843（天保14）年には「箆目籠渡世の者が宇津貫村に五名、近くの大船村、新横山村にそれぞれ一名いることが記されている。」² しかし、宇津貫でなぜメカイが作られるようになったのか、そのいきさつについては、どの資料にも書かれていないので、わからない。

それを、「嘉永年間（一八四八～五四）には田口久兵衛によって由木村（堀之内・東中野・大塚）へ」³ 伝えられた。さらに、「筋入れから尻っかがりの作業を仕上げ作業というが、この技術は由木地区にメカイを導入した田口久兵衛の子、久右衛門が考案したことが東中野の田口家に現在も伝えられている」⁴ そうだ（「筋入れ」については、第1章1.を参照）。

その後、

幕末には多摩村（多摩市東寺方・落合・乞田・貝取・連光寺）へと伝わった（中略）。明治時代末期ころに七生（注：ななお）村（日野市南平・三沢・新井・万願寺）、大正時代初期に鶴川村（町田市野津田・小野路）、大正時代後期に稲城村（稲城市坂浜上谷・

平尾・宮ノ台・矢野口)、昭和初期ころに柿生(注: かきお)村(川崎市麻生区王禅寺・早野)へと伝播した。⁵

結果として、メカイ作りは南多摩の広い範囲に伝わった。最終的には、由井村、由木村(共に八王子市)、多摩村(多摩市)、七生村(日野市)、鶴川村(町田市)、稲城村(稲城市)⁶、柿生村(川崎市)に伝わり、一大メカイ産業を形成した。

ところで、なぜ宇津貫から東へ東へと広がり、西の方へは広がらなかったのだろうか。この疑問については、「尾根沿いを走る道路は、由井村宇津貫のそばで、南北に走る街道と鉄道(注: 現在の JR 横浜線)にぶつかっており、それより西側とは交流が少なかったことが推測される。」⁷ という意見がある。



メカイ技術の広がり⁸

2. 昔の農家の副業

なぜ、農業だけでなく、副業もしなければならないのか。『新八王子市史 民俗編』には、「耕作の適地が少ない農村部では、田畑の収穫だけで生活できる家は少なく、糸機(注: いとばた)や林産物などの副業により現金収入を得る複合経営、多角経営が基本であった。」(p. 130)と書かれている。丘陵地帯の南多摩地域は、谷戸(やと)と呼ばれる山と谷間が入り混じった複雑な地形で、平らな地形ではないから、耕作の適地が少ない。そして、谷間なので日が当たりにくく、作物が育ちにくい。稲作や畑作のどれか一つに専念して生活を営むことは、耕作地の少ない農村部では、あまりできないようだ。

また、『新八王子市史 由木の民俗』(p. 107)には、

由木は耕地が少ないため、自給自足がやっとの生活を送っていた。由木村では水田はあってもそのほとんどが小作で、収穫した米の半分かそれ以上を小作年貢として地主に納めなければならない。

と書かれている。だから、農業だけに専念することはできず、副業をやらないと農家は生活できなかったのだ。

他にも、冬になると寒くなり、あまり作物が育たない(この時期を「農閑期」という)。すると、農業もできなくなるから、冬でもできる副業を行わなければならなかったのだと思う。南多摩の副業として、浅川町(現在の八王子市浅川町)産の郷土芸術品(高尾土産)、由井村・由木村の藁細工(わらざいく; むしろなど)、縄、養蚕、糸機、林産物などがある。ここに、メカイも含まれていた。

副業ではなく、メカイを専門に作っていた家もあった。『新八王子市史 由木の民俗』には「養蚕をやらない人は篠の切り旬に切っておいて一年中メザルを作っていた。ジョウメズを作るような人は、一年中専門でやっていた。」(p. 109) と書かれている。また、『新八王子市史 民俗編』にも、「なかには年間を通じて行う専業の人もいた。」(p. 132) と書かれている。

1917（大正 6）年の時点で、多摩村で特に生産額が多かったものは、下の表の通りだ。⁹

生産額が特に高かった副業（大正 6 年）

名 称	産 額	価 格（円）
生糸	618 貫	43,733
絹撚糸	390 貫	43,420
メカイ	814,000 個	20,825
下駄畳表	5,000 足	2,750

多摩に限らず、八王子も「桑都」と言われたほど養蚕が盛んだったので、やはり、副業でも生糸は盛んにつくられたのだろう。しかし、メカイもよい現金収入源となったため急速に広まり、特に農家の女性の間で盛んになった。

3. メカイ作りにおける女性の役割

なぜ、女性の間で盛んだったのか。それは、メカイ作りにおいて、女性の役割が大きかったからである。『多摩市史』(p. 175) には次のように書かれている。

（注：メカイ作りでは）男性と女性では仕事が分かれていた。材料をこしらえヨコマワシまでが女性の仕事、スジイレとフチマキが男性の仕事というように男女の分業によっていた。落合地区の跡取りは由木から嫁をもらう人が多かった。由木の方がメカイづくりの本場だったともいう。男の仕事と女の仕事が分かれていたからすぐメカイ作りの戦力になるためにはやはり実家でメカイを作っているところの方が良かったのである。（中略）一方、町場から来た嫁は苦労した。まずシキフミから習い、続いてヘネヘギを覚えた。

また、『新八王子市史 由木の民俗』(p. 114) には「メカイの生産地ではメカイを作る娘は嫁の貰い手も多く、これが縁となって嫁ぐことも多かったという。」と書かれている。

メカイを作ることができる人を嫁にするというような経済的な目的で結婚することは、今日的にはあまり考えられないと思う。現金収入を得るためだけに結婚したら、今では夫婦関係が長く持たなくなると思う。仕事のため、収入のために嫁ぐという考えがなくなり、お互いの性格や考え方が重要だからだと思う。しかし、かつては収入を得て、食べるためには、人の性格や考え方などより、仕事のメカイ作りが優先されていたのだろう。貧しい農家では、メカイによる現金収入が貴重なため、家族となった人にもメカイの作り方を教えないと家計が崩れてしまう。だから、嫁に来た人にもメカイの作り方を教えたのだろう。

手作業で大量のメカイを作らなければならなかったので、「メケエづくりの工程（中略）ごとに各自がそれを分担し、流れ作業のように行っ」¹⁰ ていたそうだ。

4. メカイの衰退

明治、大正と黄金期を迎えていたメカイだが、

昭和期に入ると、金融恐慌と世界恐慌が勃発したために、農産物や特産品のめかいや繭の価格は暴落し、多摩地域の農村は壊滅的な打撃を受けた。その後、紆余曲折を経て、第二次世界大戦の頃までにめかいづくりの全盛期は過ぎ去って¹¹

しまった。戦争になると、徴兵により農業をする男性が戦場へ行ったので、残りの人だけでは、農業を営むことができなくなったり、メカイを作るためのシノを取りに行つて、ヘネを作ることができなくなったりして、収入が得られなくなったのだと思う。

それでも、戦争が終わると、「ソコフミ（底編み）用の篠は、昭和三十年代には、遠いところでは群馬の四万（注：しま）温泉あたりまで買いに行つた」¹² という記述からわかるように、メカイ作りは続けられた。まだプラスチック製品が出回っていなかったので、再びメカイが必要になったのだと思う。

しかし、1960年代中頃にプラスチック製品が普及し、メカイは衰退してしまった。

昭和四十年（一九六五）ころ、ビニール製品や安価な輸入品が出回るようになると、「ほとんどの問屋からの注文はおかしいようにピタリと止んだ。仲買人の家買い集めてあっためかいは、店じまいする商品を処分するように安い値段で売りさばいてしまい、その頃が仲買人本来の使命が終えた時期となった」（「めかい資料館」解説パネル）という。¹³

また、2007年に発行された稲城市の「文化財ノート No. 58 めかい」によると、2007年時点では、わずかに数軒の農家がメカイを作っているが、それは出荷用ではなく、自家用として作られているので、伝統的な形のメカイではなく、創作品としての形のメカイになっているようだ。

21世紀が始まる頃には、メカイの作り方を知っている人は高齢になり、このままではメカイ技術は忘れ去られてしまう、と危機感を感じた人たちが、メカイを保存・普及させようと立ち上がった。そのうち、里山農業クラブのメカイ保存普及会（現在の八王子由木メカイの会）については第4章・第8章・第9章で、宇津貫みどりの会については第5章で、多摩めかいはの会については第6章で述べる。

第3章 メカイの材料

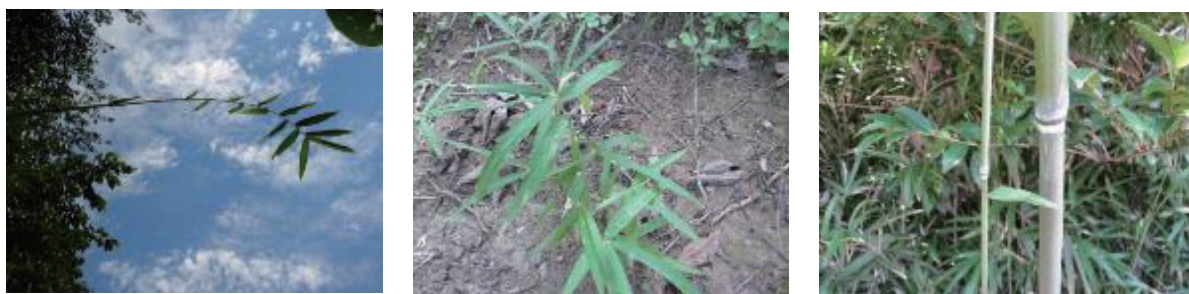
1. シノ（篠竹、アズマネザサ）

メカイの編み材となるのは「シノダケ（篠竹）」¹（以下、「シノ」と略す）だ。シノの正式名称は「アズマネザサ（東根笹）」だ。環境省が指定した多摩丘陵（由木地区）²という里山の至る所に自生している。

牧野富太郎の植物図鑑によると、アズマネザサについては、

関東東北地方に広く群生する多年生の常緑または半常緑の竹。非常に小形のものと高さ5m内外にまで達するものがある。根茎は地中を横にはい、稈（注：カン；茎のこと）は直立し中空、円筒形、表面は滑らかで緑色、長いあいだ枯れた皮をつけ、直径は小形のものは約2mm、大きいものは2cm内外ある。枝は各節から密生する。³

と書かれている。そして、「関東の山間部から東北地方に展開する『シノダケ製竹籠地帯』ともいべき生態学的広がり」に属している。」⁴



左: 背の高いシノ、中: 背の低いシノ、右: 太さの違うシノ (2023年7月31日 長池公園で撮影)

シノには、人間や他の植物にとって、困った性質がある。

繁殖力の旺盛な在来種とは、東京都の在来種であるが、繁殖力が強く、旺盛に繁茂して単調な植生となり、生態系へ悪影響を与えるおそれがある植物をいう。(例) アズマネザサなど⁵

やぶの中を覗いてみると一面にシノが生え、6~7メートルにも伸びたシノに遮られて光が届かず、立ち枯れたシノが折り重なって、シノ以外には生きものの気配のない暗い闇が広がっていた。⁶

「材料である篠竹は、増えすぎると里山に良くない影響を及ぼす」。その意味でも、メカイ文化は持続可能な循環型農業にかなったものだった。⁷

実際、今回長池公園でシノが群がって生えているところを見た。分け入るのが大変なほどだった(第8章の写真を参照)。里山を守りながら、収入を得ることは、とても効率のいい取り組みだと思った。



左: シノの茂み、右: 雑草と一緒に生えているシノ (2023年7月31日 長池公園で撮影)

2. 笹と竹の違い

牧野はアズマネザサを「竹」と説明している(前節の引用箇所を参照)。名前は「笹」なのに、「竹」となっている。そもそも、笹と竹はどのように違うのだろうか。

『日本の野生植物 木本Ⅱ』には、「タケ・ササの仲間は分類学上未解決の問題が多く、属や種の認識もまだ定説に達していない」(p. 254)と書かれている。

また、『世界有用植物事典』(p. 954)には、

日本の温帯林を特徴づけているササ類については、花があまり見られず（多くは数十年あるいは 100 年ほどに 1 回いっせいに開花する）、葉の変異がひじょうに大きい
ため、研究は困難をきわめ、種の分類についても研究者の定説がまだない（い）

と記されている。長池公園を管理している方によると、シノは、竹と笹の「あいのこ」
なのだそうだ。⁸

メカイは「竹細工」と呼ばれることもある⁹が、真竹（マダケ）や孟宗竹（モウソウ
チク）を用いた竹細工とは大きく異なっている。

3. ヘネ

シノの皮を剥いだものを「ヘネ」という。ヘネは、皮を「へぐ」という言葉が変化した
ものだ。¹⁰「へぐ」とは、『古語大事典』によると「薄く削り取る。そぎ取る。はがす」¹¹
という意味だ。この辞書には、次の例文が記載されている。

所せかりし御髪、少し一・がれたるしも、いみじうめでたきを」＜源氏・明石＞。
（以下略）¹²

このように、「へぐ」という言葉は、すでに平安時代にも使用されていることがわかる。
現在では、「はぐ」という言葉を使うことが多いようだ。

メカイには、「ニイコ（新子）」というシノを使う。ニイコとは、「今年生えた」¹³1 年目
のシノのことだ。『メカイの作り方』（p. 25）には

1 年生のシノで、ニーコ、シンコとも呼ぶ。弾力性（ねばり気）があり、メカイを編む
のに使用する。ニイコはまだ材が柔らかく、変形し易いので、一般的には細工物には
使用されない。古いシノは、ヒネ（老成、陳）という。

と書かれている。

見分け方として、先端だけ枝分かれしていて側枝が生えていないものがニイコだ。

日当たりのよさ・悪さなど、シノを伐採する場所によって作りやすさや折れやすさ
の違いもあるそうだ（詳しくは、第 8 章を参照）。そういった違いを上手に見分けて伐採
できる人こそ、里山のよき保全者といえるのだ。

メカイを作るのに適しているシノを探すためには、虫が食っていないものを探す。虫が
食っていると、シノをへぐ途中で切れてしまうためである。

切りとったものの、材料として適さない細すぎる先端部や太すぎる根元部分、切り出し
たものの虫食いなどが原因で適合しないものは、まとめて山に戻すが、かつてはその時の
「マナー」があった。それは、必要のない部分を横にたおしたままにしないことだ。次に
山に入った人が踏んで滑らないように、地面に突きたてておくことが重要なのだ。¹⁴

一度シノを伐採すると、その跡にメカイ作りに適したシノが生えるのには数年かかる。
だから、伐採するときは、ずっと同じ場所を使うのではなく、順番に違う場所を使う。実
際に、メカイを作るためにシノを伐採しすぎて、シノがなくなってしまったことがある。
多摩では、多くの農家でメカイ作りを行っていたため、シノを切る人が多く、近隣の山の
シノだけでは足りなくなった。ある人は、縁巻き用の長くて太いシノを探すために、昔、
片倉の共有林（現在の東京工科大学付近）まで採りに行った。

片倉の共有林は広く、手入れが行き届かないところがあつて、長い篠が採れた（中略）
津久井（注：現在の神奈川県相模原市）にもいい篠が採れる場所があるので行った。

篠は畑の土のような良い土よりも、砂利の方が良いという。津久井湖畔は下が砂利だからよい篠が生えた。津久井には国有地があり、しかも山が急で下草刈りができないため、竹や篠がたくさん生えていた。¹⁵

シノを求めて遠くまで出かけていたことがわかる。

また、「由木の篠を扱う問屋へリヤカーを引いて買いに行った」という人もいる。その問屋には、「津久井（神奈川県津久井郡）、黒川（同県川崎市麻生区）、真光寺（町田市）からの篠が集まってきていた」という。「篠が入ったという情報が入ると篠買いに出かけた。一度にタテジノ用を三把、フチマキ用を一把、ヨコマワシ用を一把くらい買った」という。また、「家によっては山の持ち主と契約して篠を伐る人もあった」し、「雨の夜に人の持ち山に盗み伐りをしに行く人もいた」のだ。さらに、そのことを知っている山の持ち主でずるい人もいて、「盗み伐りに来て一通り伐って束にしたところを見計らって姿を現したり、物音を立てて伐りに来た人を追い出し、できあがった束をちゃっかり持って行」ったりするようなこともあったようだ。¹⁶ 他には、「王禅寺（注：川崎市）などの近隣より購入した」り、「各自でシノを切る場合は、切りたいところの山を持っている地主の所へ行き、そこを売ってもらってから切った」りしていたそうだ。¹⁷

底を編むのに使う細い小篠（コジノ）は、鶴川村・王禅寺から買うことが多かった。

（中略）王禅寺では商売人ではなく、農家がそれぞれ戸ごとに小遣い銭稼ぎに伐って十束とか二十束とか束ねておいた篠を、買い集めてきたのである（中略）また八王子の山間部の篠も入手していた¹⁸

東寺方地区（現在の多摩市の一部）では「永山へ篠を刈りに出かけることが多かった。山にはいくらかでも篠が生えており、山主と契約するようなこともなく、どの山から刈ってもよかった」とある。¹⁹ 一ノ宮地区（現在の多摩市の一部）では、「落合の山にも取りに出かけたこともあるが、落合はメカイを作る家が多いので多摩川の土手に生える篠を刈り取って使った」という。²⁰

このように、今では、絶えつつあるメカイでも、黄金期にはシノがなくなるというほど、メカイ作りが盛んだったのだ。

山の管理者に許可なく入ったのは、お金の少なく、シノを他人から買うだけのお金がない農民がメカイを作っていたからだと思う。お金があれば、シノを買ってメカイを作ることでもできたと思うが、そもそも、メカイは主に貧しい小作人の農民が作っていたものだから、シノを買うだけのお金は持っていなかったと想像できる。

逆に言えば、それだけメカイの需要があったということだ。なぜこのように盛んだったのか。『多摩市史』（p. 176）には、「目籠作りは養蚕より収入が良かったともいわれる。養蚕は病気が出たら大変だったし気候などに左右されたが、目籠作りは当たり障りがなかった」と書かれている。蚕のような生き物を育てることと、純粋な「物」を作ることでは、「物」を作るほうが簡単だと思う。生き物を育てるには、えさを与えたり、体調を管理したりするなど、作業が大変である。また、そのためのお金も必要となる。しかし、メカイの材料となるシノは、自分で栄養を吸収し、自分で自分を育てているので、人間が育てる必要がない。繁殖力が強く、どんどん生えてくる（本章 1. を参照）。だから、プラスチック製の容器が登場するまでの間、メカイ製作は一大産業となったのだと思う（第 2 章を参照）。



左：プラスチック製の笊、右：プラスチック製の籠

■コラム パンダ

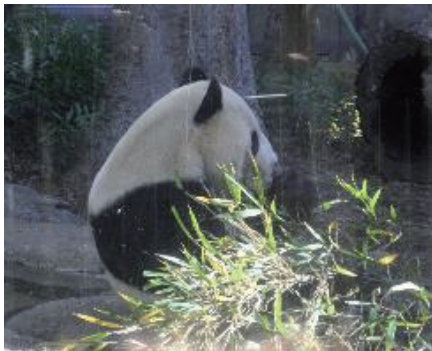
ジャイアントパンダ（以下、「パンダ」と略す）は竹を食べるのか、笹を食べるのか、その両方なのか。稲葉茂勝『教科で学ぶパンダ学』によると、「竹や笹の葉、タケノコを好んで食べて」（p. 40）いるようだ。また、近年、「昆虫やネズミなどの小動物も食べることがわかってき」（p. 40）たそうだ。したがって、上の問いの答えは、竹も、笹も、それ以外のものも食べる「雑食です」（p. 40）となる。

しかし、竹であればどんな種類でもよいわけではない。食べられる種類が決まっている。ただ、『教科で学ぶパンダ学』には、具体的にどんな種類に限られるのかは書かれていない。

竹は数十年、種類によっては百年の一定周期ごとに一斉に開花時期を迎え、数か月後には枯れてしまう。その度に、食べられる種類が限られているパンダは、餓死の危機におちいることになる。実際、1970年代半ばには、中国四川省北部～甘粛（かんしゅく）省南部の岷山（みんざん）一帯で竹が一斉開花したときに、多くのパンダが餓死した。¹

ちなみに、「上野動物園のジャイアントパンダ情報サイト」でも、「ジャイアントパンダがタケ・ササを食べるのはよく知られていることなので、草食動物のようにみられますが、じつは食肉目クマ科に分類される肉食性の強い雑食動物のなかまです。」と書かれている。「腸の長さが体長の約 4 倍と短いのも肉食動物の特徴といえます（ウシ・ヒツジなどの草食動物は 20～25 倍あります）」とのことだ。

とはいえ、パンダがヒグマのようにサケを捕まえて食べている姿は想像できない。



パンダのリーリー（2017年1月4日 上野動物園で撮影）

第4章 里山農業クラブと八王子由木メカイの会の活動

1. ユギ・ファーマーズクラブ¹

堀之内、東中野、越野地区は、ニュータウン最後の開発地区だった。しかし、寺沢地区に十数軒あった酪農家などが「新住宅市街地開発法（新住法）」により酪農が続けられなくなることに反対運動を起こしていた。その後、反対運動が弱まっても、酪農を継続するには土地が必要であり、土地を一部戻せと要求し続けた。その結果、「ニュータウンの計画決定後に一部が酪農地として外されることとなり、反対運動の中心となっていた家の田畑で農作業を行う『ユギ・ファーマーズクラブ』（正式名「由木の自然と農業を守る会」）が結成された」² のだ。ユギ・ファーマーズクラブは、「開発反対の立場から、その後、都市と農業の共存共栄を目指す活動を行った組織」³ へと変化した。当時は、酪農施設の牛乳を集めるミルクプラントを作るという酪農事業としての大きな構想があった。これには、地域づくりの専門家などが関わっていた。開発の反対から、都市と農業の共存共栄を目指すことになったのは、開発に対する考えが変わり、「お互いに栄えよう」となったのだろう。

しかし、会の中心となっていた酪農家が死去してからは、「ほとんど活動が行われていない」⁴ そうだ。

多摩ニュータウン開発のための買収前、丘の南側は一面畑だったが、買収により耕作が放棄されたため、土地が荒れ果てていた。⁵ 荒れた土地を見かねた以前の土地所有者が、従来の使い方なら使ってもよいという暗黙の了解を得て、一人で手入れをしていた。

その後、手伝いたいという希望者が出てきた。さらに、阪神淡路大震災でボランティアが見直され、当時の経団連（日本経済団体連合会）がユギ・ファーマーズクラブにボランティアをしたいと言ってきた。ファーマーズクラブでは場所がなかったため、前に土地を所有していた人の土地だったところを畑に改造してもらい、野菜を作り始めた。農家だった家もニュータウン開発による買収で畑がなくなったため、農業をしたいと言ってきた。その農業をしたいという人たちの間で「里山農業クラブ」の設立の話が上がった。

2. 里山農業クラブの誕生⁶

里山農業クラブが結成されたのは、2000年12月12日だ。2000年は平成12年で、「12」が3つ並んで覚えやすくなるようにわざわざこの日にしたという。

東京都が2009年3月26日に指定した「八王子堀之内里山保全地域」⁷の一部である堀之内の宮嶽谷戸（みやたけやと）で2反5畝（にたんごせ）（約2500㎡）の田んぼを中心に活動を始めた。ちなみに、東京都が最初に指定した保全地域は、「野火止用水」（小平市中島町から東久留米市小山5丁目に至る野火止用水路及び隣接樹林地）で、1974年12月13日に指定された。⁸

里山農業クラブの基本理念は「農なくして里山なし」。⁹ 里山の自然は農業に活用することで残すことができるという考えに基づいており、循環型社会の構築を目的としている（「コラム 資源循環型農業」を参照）。その里山が、現在の「八王子由木メカイの会」がシノを伐採している里山なのだ。

2003年6月12日付でNPO（特定非営利活動法人）に認証された。NPOとは、『Non-Profit Organization』又は『Non-for-Profit Organization』の略称で、様々な社会貢献活動を行い、団体の構成員に対し、収益を分配することを目的としない団体の総称」¹⁰ だ。したがって、「利益を目的とする事業を行うこと自体は認められ」るが、「事業で得た収益は、様々な社会貢献活動に充てることに」なる。¹¹ NPO化したのは、地域の信用を得るためだった。土地を借りて活動するため法人として責任を持つということであった。里山農業クラブでは、会員の私有地か、土地を借りて活動をしている。地代（土地の使用料金）を払ったら活動が成り立たないため、地代は一切払っておらず、この点を理解してもらえぬ地主から土地を借りて活動している。それは、ボランティアとして活動しているので、地代を払えば持っているお金がなくなってしまうからだと思う。その代わり、土地の管理をしっかりとやっている。あくまで、地元で親しみつつ長く住むために自然を守る活動を行い、雑木林の管理など、古くからのその土地のやり方で行っている。もともと畑だった場所が、荒地となり、それを見かねた前の土地の所有者が「以前のやり方で土地を畑にしてほしい」と思っていたからだと思う。

ただ、2012年2月にNPOを解散し、「任意団体里山農業クラブ」となった。10年続ければ、NPOでなくても地域からの信頼を得られるという当初の計画だった。¹² また、NPOは役所への届け出や登記、総会の開催、会計など大変な仕事が多かったのだ。農業指導ができる後継者の問題もあって、活動はやめず、今後も活動を整理しながら続けていくことにした。¹³

循環型社会を目指すために、本来はゴミとなるものを「資源」として再利用している。その一環として、落ち葉の活用や、炭焼きも行っている。買収から17、8年がたって、孟宗竹が密生してしまい、荒地になっていた。竹を伐採するだけでなく、何か活用した

い、ということで竹炭焼きを始めた。炭焼き窯は大正時代に作られ、天井が崩落していたものを直して使った。人工ではなく、自然の窯（地面を掘って、人工の屋根を置いた窯）で焼くことは周辺では他にない。また、竹を焼くのは木よりも大変で手間がかかる。天井の高さが 90 cm なので、竹を 80~90 cm に切りそろえ、4 つに割って中空の空気を抜いて節を落とすなど、竹の焼き方も勉強したそうだ。竹の太さにもよるが、1 窯で 50~80 本の竹が必要で、最盛期には年間で 3 窯（竹は 200 本以上が必要）くらい竹炭を焼いた。¹⁴

しかし、現在は窯のある周辺しか竹がなく、開発が進んで雑木林もなくなっている。火を扱うため、火事が起きた時の対応や、悪臭に関する住民からの苦情などの問題があり、さらに焼くのに三日三晩かかるほど大変な労力が必要である。そのため、「今後続けられるかは未定」¹⁵ だそうだ。

炭焼きのあと、「田もやろう」ということになり、水田を作り、稲作を始めた。田は、寺沢の奥の宮嶽谷戸と里山農業クラブの倉庫や炭焼き窯がある沖谷戸（おきやと）にあり、毎年 400 kg（スーパーで販売されている 5 kg 入りの米の 80 袋分）ほどの米を作っている。田植えの最終日には昔からの地域での呼び名を用いて「植田正月」をして、焼き肉パーティーなども行われた。¹⁶

また、「田んぼの学校」¹⁷ という幼稚園や小学校の体験学習も行っている。毎年、400 名ほどが参加している。田植えや草取り、収穫までしてもらい、一連の作業を行わないと受け入れないことになっている。学校によっては、田起こし（「田植えの準備として、田を掘り返す農作業」¹⁸）や代掻き（「水もれを防ぎ、苗の活着・発育をよくするため、田植前の田に水を満たし、土塊を砕き田面を平らにする作業」¹⁹）から行っている。里山体験農場の畑もあり、休耕農地の有効活用として所有者と農作業希望者との間に入っている。

3. 八王子由木メカイの会の誕生

里山農業クラブは、里山の自然を守り、かつ、里山の農耕地を確保するために設立されたが、放置された農地に、シノが繁茂していた。繁殖力の強いシノ（第 3 章 1. を参照）は、里山を荒らし、悪影響を及ぼすので、放置できない。そこで、里山農業クラブでは、「里山を荒らすシノの活用と、地域の民俗伝統技能の継承」²⁰ を目的として、メカイ作りを始めた。耕作放棄された畑にシノが侵入して藪になってしまうことに危機感を抱いたことに加え、メカイの技術を知っている人が年々少なくなっていることにも危機感を抱いたのだ。厄介者のシノをただ伐採するのではなく、あくまでも、自然のものを活用しながら生活するのが大事なのだ。こうすることで、里山を守り、同時に、廃れかけたメカイ技術を守ることになるのだ。

そのためには、国の文化財（選択無形民俗文化財・民俗技術）に指定されることが大事だと思って、それを目標にしていた。²¹

「里山農業クラブ 第 141 号」によると、次のように移り変わってきたそうだ。

里山農業クラブ→里山農業クラブ・メカイ教室→里山農業クラブ・メカイ保存普及会
→八王子由木メカイの会

このうち、メカイ教室ができたいきさつについては次のように書かれている。

我々の師匠であった金子治男さん（中略）の提案で、里山農業クラブ内にメカイ教室を作って生徒を募集し、メカイ技術を学び始めたのは 2002 年です（中略）最初の生徒で残っているのは、私達夫婦（注：塩谷さんご夫婦）だけになりました。²²

塩谷さんによると、「当初の主目的は、経験者（注：金子治男さんたち）からのメカイ技術の修得、レベルアップ」だったそうだ。²³

メカイ教室がメカイ保存普及会へと変わったいきさつは次のとおりだ。

（注：メカイ教室を始めてから）約 10 年経って、技術力もアップしてきたので、主目的を、後継者の育成と保存普及活動としたのです。2014 年からです。²⁴

初めの、師匠からメカイ技術を習おうとした意欲が、技術を伝承するために、今度は教わった世代が次の世代へとメカイ技術を教えていく、というバトンタッチは、メカイの保存・普及には、とても大切なことだと思う。保存し続けるためには、このように、習ったら、次の世代へと伝承させることが大切だと思う。しかし、次の世代へ伝統技術を伝えることは、はたして簡単なことなのだろうか。これについては、第 9 章で考える。

そして、里山農業クラブ・メカイ保存普及会から八王子由木メカイの会を分離させたのは、東京都文化財審議会の答申より前の 2023 年 1 月 1 日だそうだ。塩谷さんは、「私達が指定を目指していたのは国の文化財で、私は東京都の文化財に民俗技術があること自体を全く知りませんでしたので、驚くばかりです。」²⁵ と述べている。

農業や里山を保持し、メカイ技術を伝承することは、それをやろうと思う人たちに、守り続けて、次の世代へと伝えたいという思いがあるからこそ可能なのである。そして、一度やり始めたら、途中で投げ出すわけにはいかない。20 数年間、里山農業クラブとしての活動と、メカイ普及活動が続けてきたことは、偉業だと思う。趣味でも、仕事でも、何十年と続けることはとても大変な作業だ。メカイも、シノを伐ったり、ヘネを作ったりするなど、力仕事や面倒な作業がある。そんな大変な作業をやめずに 20 数年にもわたって続けてきたことは、偉業だと思う。

■コラム 資源循環型農業

「資源循環型農業」とは、

米や野菜などの農産物を収穫した後のわらや収穫くずが家畜のえさとなり、その家畜のふんから堆肥が作られ、その堆肥で農産物が育つ。このように、有機資源を循環させながら農産物を生産する営み¹

である。「地力を維持し、持続性が高い理想的な農業体系といえ」² 。

「資源循環型農業」を推奨している酪農家もいる。それは、八王子市小比企町にある「磯沼ミルクファーム」だ。³ 具体的には、食品工場から出る野菜や粕類（ビール粕やあんこ粕など）や、豆腐屋の「おから」などをエコフィードとして給餌している。また、チョコレート工場やコーヒー工場から出る豆や殻を牛床（牛の寝床）に敷いている。

エコフィード (eco-feed) とは、

食品残さ等を利用して製造された飼料です。エコフィードの利用は、食品リサイクルによる資源の有効利用のみならず、飼料自給率の向上等を図る上で重要な取組です。⁴

本来なら産業廃棄物として廃棄されるものを、牛のエサや敷料として利用・活用することで、廃棄コストやエネルギーの削減に繋げている。さらに、牛の糞尿を発酵させることで堆肥を作り、近隣の農家の人にも使ってもらっている。



磯沼ミルクファーム 2011 年 1 月 23 日撮影

ところで、メカイの場合はどうか。電気もガスもなかった江戸時代や明治時代の初め頃のメカイを想像してみる。すると、次のような流れになるだろう。

シノ→伐って編んでメカイとなる→メカイを使用する→使い古して使えなくなる→？

使い古して使えなくなったメカイは、現代なら、燃えるゴミとして出し、クリーンセクター（焼却炉）で燃やされて終わりだろう。しかし、江戸や明治の時代なら、燃料として使用したはずだ。⁵すると、上の流れは次のように続く。

使い古して使えなくなる→燃料として使用する→灰が残る→？

今も昔も、燃やせば灰が残る。現代なら、最終処分場に埋め立てるか、「エコセメント」として再利用されるだろう。⁶しかし、江戸や明治の時代なら、畑の肥料として再利用されていたはずだ。すると、上の流れは次のように続く。

灰が残る→残った灰は肥料として再利用する（現代でも、「草木灰」として販売されている）→野菜などが育つ

たしかに、「有機資源を循環させ」ている。

しかし、「循環」には2タイプある。

1つ目のタイプは、始まったところに、最後戻るという循環である。例えば、野菜（ナスとする）を収穫した後の収穫くず（茎など）が家畜のえさとなり、その家畜のふんから堆肥が作られ、その堆肥でナスが育つ。ナスから始まり、ナスで終わり、再びナスから始まり、ナスで終わる、というように、ぐるぐる循環する。

もう1つのタイプは、シノを使ったメカイの場合である。上で述べたように、メカイのサイクルは次のようになる。

シノ→伐って編んでメカイとなる→メカイを使用する→使い古して使えなくなる→燃料として使用する→灰が残る→残った灰は肥料として再利用する→何が育つか？

灰は肥料として畑にまくはずだ。しかし、畑にシノを植えることはなかったはずだ。シノはいわば雑草だからである。そうすると、シノで始まったが、シノでは終わらず、例えばナスのような野菜が育つ。したがって、初めと終わりが一致しない循環となる。つまり、シノとメカイの資源循環は、一度循環の輪に入ったら、入ったところ（つまりシノ）には戻らずに循環する、ということだ。ナスのような野菜の場合は、人間が植えて育てないと、ふつうは育たない。ところが、シノの場合は、人間が植えて育てなくても、勝手にどんどん生えてくる（第3章1.を参照）。だから、シノで始まりシノで終わらなくても、シノがなくなることはなく、その後、またシノを伐ってメカイを作り、…というように循環するのだ。

資源循環型農業を、「ゴミ」という観点から眺め直すと次のように言える。

江戸や明治の時代では、資源を循環させていたのだから、ゴミは出なかったことになる。それに対し、今日、もし焼却灰を最終埋め立て地に埋めれば、それはゴミとして終わったことになる（エコセメントにすれば、ゴミにはならない）。

それでは、厄介者のシノについてはどうだろうか。今日、もしシノを伐採して燃えるゴミとして出せば、ゴミとして終わる。しかし、メカイとして利用すれば、その段階ではゴミとはならない。メカイを長く使い続ければ、ゴミにならずに済む。⁷

里山農業クラブの考えは、メカイ作りでシノを利用することで、シノの増殖を防ぎ、山里の耕地を守ることである。⁸ つまり、メカイの保存・普及活動は、里山を荒らすシノをゴミにせず活用し、同時に、地域の民俗伝統技能を伝承することなのである。

第5章 宇津貫のメカイ

1. メカイの発祥の地：宇津貫

宇津貫は『めかごづくり』の発祥の地¹である（第2章1.を参照）。現在は八王子市宇津貫町となっているが、江戸時代は「武蔵国多摩郡宇津貫村」であった。² その後、1871（明治4）年7月の廃藩置県令により、神奈川県に管轄となった。1878（明治11）年7月には神奈川県南多摩郡宇津貫村と変わった。1889（明治22）年9月の市制町村制の施行にともない由井村ができ、由井村宇津貫となった。さらに1893（明治26）年の三多摩全域の東京府移管により、東京府南多摩郡由井村宇津貫となった。そして、1955（昭和30）年に八王子市に編入され、八王子市宇津貫町となった。

宇津貫が八王子市に編入された当時は、次のような状況であった。

大部分の家で農業が行われていた。畑作が中心で、田は谷間に存在する谷戸田を利用した小規模の耕作が多かった。農家の現金収入としてはやはり養蚕が盛んであり、山沿いの畑には桑が多く植えられていたものであった。（中略）副業としてのメカイづくりは盛んで地元は勿論のこと近在の仲買人なども買い集めに来るほどであった。³

当時の日本は、農業国だったため、谷戸、つまり谷間で日が当たりにくい場所でも農業を営んでいた。由木と同じく、宇津貫も多摩丘陵に位置しており、谷戸となっていた。ただ、谷間の田んぼ（谷戸田）だから土地がせまい。さらに、日が当たる時間が短いため、米があまり収穫できない。稲作だけで生活するためには、開けた、広い田んぼが必要だ。田を広げるわけにはいかないので、稲作だけで生活できず、どうしても副業で現金収入を得る必要がある。副業として養蚕を営んでいる人もいたが、それができない人は、メカイを作っていた。なぜなら、養蚕をするには、たくさんの道具が必要だからだ。また、養蚕には蚕を育てる場所も必要だ。それには、お金がかかってしまう。だから、貧しい人々は、生きていくために必死にメカイを作っていたと思う（第2章2.を参照）。

その後、宇津貫におけるメカイ作りは続けられ、「昭和の一時期（注：おそらく第二次世界大戦の前）は作っても作っても作り足りないで仲買人が競って買い上げていく時期もあった」⁴ そうだ。八王子の地域情報誌『はちとび』によると、1914（大正3）年に刊行された『東京府南多摩郡農会史』には、「明治末年に南多摩郡全体で約350軒の農家が年間53万個ものめかごを生産していたという記録」⁵があるそうだ。

2. 宇津貫の人たちの証言

『めかご』は「宇津貫在住者（区画整理事業の施行にともない、仮住まい住宅に住んでいる者も含む）で今でも目籠を作っている人、またはかつて作ったことのある人」⁶を調査対象として聞き取り調査を行い、その調査結果をまとめたものである。そして、5名の経験者に集ってもらい、座談会も行っている。⁷ 以下は、この座談会での証言である。

昔から宇津貫に住んでいる人は、「メカイが盛んだった頃、たいがいの家の軒先には束ねたシノが積んであった」⁸と証言している。特に、宇津貫で多く作られていた「シキメカイ」（第1章2.を参照）は、「周りに長く出ているシノを縛ると魚が煮くずれしないことか

ら人気があり、築地の魚市場で飛ぶように売れた」⁹ そうだ。「煮る鍋の大きさに合わせ、18 本から 24 本のもので編んだ。大きいものは値も良かった（中略）普通の人で、一時間に 2〜3 枚、早い人で 4 枚作れた」¹⁰ そうである。

また、作業に使う「前かけ」という、衣服を傷つけないようにするための布が、シノで切れてしまい、¹¹ それを「継いで継いでどれが本物なのか分からなくなったこともあり、膝かけ（注：前かけ）には丈夫なメリケン袋を使うようになった」ようだ。¹² さらに、「カゴの中にボロ布を入れておき、人差し指と親指に布を巻き付けてから編みはじめ」という工夫もされていた。¹³

また、刃物を使うため、小さい子どもは寝かしつけておき、赤ん坊が泣いていて困ると、おぶって作業をしたという。¹⁴

たくさんメカイを作って売らないと、収入が少なくなるので、忙しかったと思う。また、膝かけは、切れても新しい布を使うことがもったいないし、おそらく、その材料はほとんどなかったと思う。だから、古いボロ布を使ってつぎはぎしたのだと思う。

3. みなみ野ニュータウン開発とメカイ作りの衰退

そのような「静かな山村にも都市化の波は押し寄せつつあった」。¹⁵ 1955 年頃から 1965 年頃にかけて、大手不動産業者による大がかりな土地の買収が始まった。農家の若い人々は農業をやらず、勤め人として近郊の町へ出かけ、農業は老人と女手による細々とした耕作に変わった。すると、「谷戸の風景は一変し、クズバフジが思うまま大地を覆い、山の下草は自由に生い茂り、農道は草に覆われその所在を失うほど」¹⁶ になってしまった。つまり、耕作放棄地に雑草が生い茂ってしまったのである。

さらに、1988 年には南八王子土地区画整理事業の一環である南八王子ニュータウン（みなみ野ニュータウン）の工事が始まった。「山肌はあらわに削り取られ（中略）谷戸田は押し埋められ」¹⁷ てしまった。つまり、雑木林がなくなってしまったのだ。だから、メカイを作るためのシノが入手しにくくなったと思う。

このような変化は、メカイ作りの衰退に大きく影響した。主な原因は 3 つある。

- (1) 農作業が主だった時代から、外へ出かけて、会社で働くようになったこと。
- (2) 開発により、雑木林がなくなり、シノが入手しにくくなったこと。
- (3) プラスチック製品が出回り始めたこと。

これらは、宇津貫以外の地域でも同じだ（第 2 章 4.、第 4 章 3.、第 6 章 1. を参照）。

4. 宇津貫でのメカイの保存・普及活動

このような大きな変化によって、「先人達の残してくれた貴重な遺産、財産が今を逃すと無くなってしまうという危機感」を持った人が立ち上げたのが、「由井地区ふるさと資料館建設推進発起人会」だ。¹⁸ この会は、1991 年 5 月に発足した。その後、「資料の調査収集、市当局への要請、建設構想、広報活動、各種イベント」などの活動を経て、1994 年 10 月に「ふるさと資料館建設推進委員会」となった。

そして、「農具、民具、文書、埋蔵物、地域産業等の調査を行っていくうちに『めかご』（注：めかごの資料など）が多く集まってき」¹⁹ た。

現在では時代と共に（注：めかご作りは）仕事としては成り立たず、また、後継者もなくこの（注：めかご作りの）技術を伝えることの出来る人達は高齢化していき、このままでは「めかご」が絶えてしまおうとしている²⁰

この状況は、第4章で取り上げた由木地区と同じである。

そこで地域の伝統を守り、継承して後世に残すことが私達の責務であり、この伝統工芸を守るには、どうしたら良いか、また現代の生活で活かせる方法はないかと思案しながら『めかごづくり講習会』を行っ²¹

たそうだ。由木地区（第4章3.を参照）と同じように、廃れかけたメカイ技術を守ろうと、宇津貫の人々も立ち上がったのだ。

5. 宇津貫みどりの会の活動

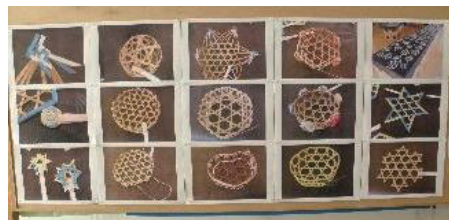
宇津貫地区では、「宇津貫緑地の自然環境保全と里山文化の継承を目的」²²として、1991年10月6日に「宇津貫みどりの会」が結成された。「地元の有志が集まって発足したボランティアによる任意団体」²³である。活動内容は、大きく3つある。

- 1、宇津貫緑地の自然環境を守る活動
- 2、宇津貫緑地の自然に親しむ活動
- 3、みなみ野シティ開発前の歴史・文化の伝承活動²⁴

このうち、3の活動の1つとして、「宇津貫が発祥の地とも言われ、南多摩地区で昔から作られた、目籠（めかご）作りを伝えるお手伝いをして」²⁵いる。「宇津貫みどりの会」公式サイト「宇津貫あれこれ 12. めかご」には次の記載がある。

宇津貫みどりの会の有志が地元の子どもに、メカイの作り方を教えている。この地で生まれた伝統技術が、絶えることなく次の世代へと引き継がれていこうとしているのだ。メカイ作りをしながら、一木一草をもおろそかにしない先人の生活ぶりを知ること、子どもが地域の文化に触れてくれるとは喜ばしいことだ。²⁶

また、公式サイト「『宇津貫みどりの会』の歩み」によると、1996年、2010年、2011年には「めかご教室」などが開かれている。このうち、2011年3月2日には、八王子市立七国中学校の総合学習授業で「めかご体験」が行われた。²⁷めかごの歴史についての説明の後、荷造り紐を使ってコースターを編んだようだ。その時の作品の写真が「ふるさと資料室」（本章6.を参照）に掲示されている（下の写真）。²⁸シノを伐るところから始めるのは中学生では難しい（第9章を参照）し、ヘネの準備が大変なので、手に入りやすいビニール紐を使っている。²⁹



中学生の作品

しかし、公式サイト「活動の記録と予定（定例会のレジュメ）」（2022年1月～2023年7月）を見たかぎりでは、この間、「めかご教室」などは開かれていない。メカイ作りの講習会をやめたのかどうかはわからないが、すくなくとも、「八王子由木メカイの会」のように継続的にメカイ活動が行われているわけではないようだ。³⁰

ところで、「宇津貫あれこれ 12. めかご」には、「メカイに関するおもしろい風習が宇津貫にある」というので紹介する。

(注: 毎年) 2月8日と12月8日に一つ目小僧がやってきて、履物に印をつける。印をつけられると病にかかるので、すべての履物を家の中に仕舞い込んだ。一つ目小僧除けには、メカイを紐にかけ、輪にして家の戸口に吊るす。このときのメカイの目は、一つ目小僧の目よりも細かいのがよいとされた。(中略) このような風習が生まれたのも、メカゴは神が宿る依り代だとされたからだろう。³¹

メカイを、ただの「物」として扱うのではなく、「神様」として捉えることが、この地域の風習なのだろう。それは、メカイを神聖なものだとして、大切に扱う証拠だと思う。そして、目を細かくして、上等なものを作ろうという意識にもつながったのだと思う。

6. ふるさと資料室

メカイの発祥地におけるメカイについて調べるために、2023年8月12日に「由井市民センターみなみ野分館『ふるさと資料室』」を訪問した。ここでは、メカイの他にも、宇津貫で集められた、昔のラジオや、蓄音機、小学校の教科書などが展示されている。

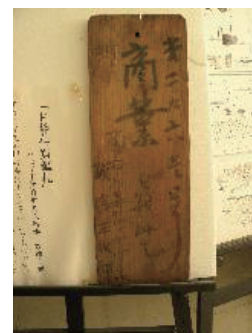
メカイの展示コーナーでは、様々な大きさの「めかご(目籠)」が展示されている。宇津貫に特徴的な「シキメカイ」も展示されている(写真)。

壁には、メカイの歴史などを解説したパネルが掲示されている。それによると、「丈夫で使いやすいため人気が高く、天保の頃にはすでに仲買人まで出していた記録が残っているそう(第2章1.を参照)。その証拠品とも言える「目籠仲買鑑札」が展示されている(写真)。

別のパネルには、「目籠づくりは農家の副業というより、現金収入の点では本業といってもよいほどでした」と書かれており、昔はメカイ作りが盛んだったことがわかる。しかし、「今ではこの技術を受け継ぐ人も少なく、伝統工芸の領域に入ってしまった」とも書かれており、ふつうの「製品」として扱われていたメカイは、今や伝統的な「工芸品」となってしまったのだ。つまり、当たり前だったものが、貴重なものになったぐらい、作り手が少なくなったのだと思う。



左: ふるさと資料室のメカイコーナー、右: 展示されている様々なメカイ
写真はいずれも2023年8月12日に「ふるさと資料室」で撮影



左: シキメカイ。ヘネが立ち上がっているのが特徴。中: 荷造り紐で編まれた籠、右: 目籠仲買鑑札

資料室の奥のガラスケースの中には、メカイ包丁やシノ切り鎌が展示されている。



左: いろいろなメカイ包丁、右: いろいろなシノ刈り鎌

展示されているメカイ包丁は、どれも「角（ツノ）」がないという点で、由木のメカイ包丁（第8章の写真を参照）とは異なっている。

第6章 多摩のメカイ

1. 多摩のメカイ

メカイが多摩村（現在の多摩市）に伝わったのは、1865（元治2、慶応元）年頃と言われている（第2章1.を参照）。由木村から伝わった。メカイの作り手の他に、仲買の人も所々にいた。¹ 多摩のメカイ製作の中心地は、落合地区だった。ここは、由木村と同じように、生産・集荷の中心地だった。そして、1935（昭和10）年頃には、多摩村と由木村を合わせて「全村の七割」² がメカイ作りをしていた。

1887（明治20）年頃には、仲買および製造者のグループがあった。西組と東組に分かれていて、西組の内訳は、八王子町・八日町（現在の八王子市八日町）・宇津貫村の18人であったと落合地区の田中茂家文書の『目籠商業連名簿控』に書かれている。しかし、一方の東組は、文書が失われているため、詳しくはわからないが、由木村と多摩村のメンバーで構成されているのではないかと、言われている。³

また、『多摩町誌』には、1896（明治29）年の多摩村納税者の一覧が書かれている。その中で、生糸や繭と合わせてメカイの仲買をしている人が8人挙げられている。さらに、メカイの製造者では2人挙げられている。仲買の人は、繭や生糸も一緒に扱っており、地域的には落合地区が多いと言える。⁴ メカイを副業として作っている人が、納税をできたぐらい、収入が大きかったのだと思う。

1916（大正5）年頃の時点で、メカイ作りに関係していた戸数は982戸で、そのうち、由木村と多摩村が88%を占めていた。多摩村の全戸数は、記録がないため、一番近い1919（大正8）年の記録を見ると、707戸である。戸数に急激な増減がないと考え、1916年の時点でのメカイ関係者は、480戸となる。つまり、半数以上の約68%がメカイに関する仕事をしていたと言える。しかし、男女比でみると、由木村は1家庭の中で1人の男性とおおよそ2人の女性で作っていることになる。一方で、多摩村の割合は、0.3人の男性と1.2人の女性で作っていることになる。⁵ どちらの村にも共通することは、やはり、男性よりも女性のほうが、作り手が多い、ということだ（第2章3.を参照）。

『多摩町誌』によれば、1925（大正14）年の副業別の世帯数は、メカイ作りは113世帯だが、養蚕が322世帯と、メカイ作りの世帯数をかなり上回っている。⁶ これは、家々の副業としての捉え方や考え方が違ったためだろう。つまり、「副業」としての職業であれば、養蚕のほうがよい、と考える人が多かったのだと思う。

一時期は盛んに作られたメカイであったが、やがて衰退した(注: 第2章4. を参照)。目籠作りは第二次世界大戦前に下火になっていた。それでも戦後も割烹料亭用の注文があったが、プラスチック製品が出始めることによって注文がなくなり、さらに昭和四十年ころからのニュータウン計画の始まりで材料がなくなり全く作られなくなった。⁷

衰退した原因は、ここでもプラスチック製品が出回ったことと、住宅開発によって雑木林がなくなり、そこに生えていたシノがなくなり、材料が手に入らなくなったことだ。

2. 多摩めかいの会

2023年3月に「南多摩のメカイ製作技術」が「東京都指定無形民俗文化財(民俗技術)」に指定された(「はじめに」および第7章を参照)が、「(注: 多摩)市内で活動する『多摩めかいの会』が都指定無形民俗文化財の保存団体として認定され」⁸た。つまり、保存団体として、八王子由木メカイの会(第4章3. を参照)の他に、永山地区の「多摩めかいの会」も認定されたのだ。

柚木さんによると、多摩では、開発前からその地で農業を営んでいた人たちと、ニュータウンに移り住んできた人たちとの交流のために、行政が関与して、メカイ作りを通して交流を深めさせようと考えていたのだ。⁹

このように、地域によって、メカイとのかかわり方に違いがあるのだ。

多摩めかいの会の公式サイト¹⁰によると、多摩めかいの会は「市民活動きっかけづくり事業『多摩のめかいづくり』講座の修了生があつまってできた会」なのだそう。毎月第一水曜日に定例会があり、第三水曜日を作業日としている。¹¹ 普段は、多摩センターの多摩中央公園内にある多摩市立グリーンライブセンターで作業をしている。「11月頃から翌年2月頃まで篠竹を伐採しヒネづくり」¹²をして、毎年11月頃に市民向けのメカイ講座を開いたり、永山フェスティバルや、エコ・フェスティバルなどのイベントにも参加したりしている。

また、2015年2月5日には、宇津貫みどりの会(第5章5. を参照)の依頼で、八王子市立七国中学校の1年生にメカイのコースター作りを教えた。¹³ また、2023年7月15日には、多摩市立多摩中学校の「多摩中学校伝承文化継承会」において、1年生を対象にクラフトバンド(牛乳パックや古紙を再生した手芸用の紙ひも)を使い、「めかい作り体験」を行った。同時に、メカイの歴史についての講義も行った。¹⁴

多摩めかいの会の会長の長瀬敏雄さんは、『タウンニュース』の取材に対し、次のように語っている。

定期的に会でメカイづくりにあたる機会を設け、年に一度、市民向けの教室を開いてきた。保存団体として認定を受け、プレッシャーを感じるが、後継者づくりも見据え、活動していきたい¹⁵

また、事務局業務を担う岡野則夫さんは、「多摩には八王子の絹、稲城の梨のように名産品が無かったことから、お金を稼ぐため、メカイをつくっていた」と話している。多摩にメカイが伝わってからは、八王子や稲城以上に、メカイを必死につくっていたのだと思う。

岡野さんは、メカイ技術について、「エコそのもの。SDGsの取り組み」と表現している。また、最近は「スマートフォンを入れるためのメカイをつくる人もいる。今の生活に合わせた使い道もあるだけに多くの方に知ってもらいたい」と考えている。

多摩地区のメカイは、多摩市の「ふるさと資料館」¹⁶で展示されている。

■コラム 「多摩ニュータウン」の開発

ここで、「多摩ニュータウン」について、説明しておく。

これまで農業を営んでいた土地も、1965年から「多摩ニュータウン」の開発が始まり¹多摩丘陵地にあった里山も切り開かれて、減少した。

開発する直前、多摩町の人口は約1万人で、兼業農家が多く、米や野菜を作り、養鶏・養豚なども営む農村地帯だった。²また、丘陵地の谷戸の部分では水田を営み、丘の部分では山林で伐採した材木で炭焼きなどを行っていた。

その一方で、この頃になると、山林を売り、「桜ヶ丘団地」や「府中カントリークラブ」などのような住宅地やゴルフ場の開発も行われるようになってきていた。多摩ニュータウン開発計画が決定すると、1968年の終わりには耕作は停止され、本格的な工事が始まっていった。多摩ニュータウンの開発は、2006年まで続いた。

多摩ニュータウンの開発に合わせて、鉄道路線も次々と開業した。³

住民は、交通手段がなかったため、「怒りに火を点け」た状態だった。⁴日本鉄道建設公団法という法律があった。日本鉄道建設公団とは、「国鉄の新規路線を建設することを目的にした特殊法人」⁵のことだ。国が、1972年に法改正し、「P線方式」という手法で私鉄路線を建設させた。P線方式とは、「大都市圏の私鉄が、輸送力の増強のため緊急を要する路線の建設又は大改良を行なう際の資金助成方式」⁶のことだ。

そして、住民が待ち望んでいた私鉄路線が開業した。それは、1974年6月にできた小田急電鉄の新百合ヶ丘駅～小田急永山駅間だ。この路線は「多摩線」と名付けられた。同時に、本線である小田原線との分岐点となる「新百合ヶ丘駅」も開設された。しかし、多摩線の電車は、ごく一部を除き、新百合ヶ丘駅までの折り返し運転をしていたので、新宿へ行くためには、新百合ヶ丘駅で乗り換えなければならず、不便だった。

少し遅れた同年10月に、京王帝都電鉄（現・京王電鉄）が、京王よみうりランド駅～京王多摩センター駅の間を開業させた。路線が短かったことや、単線区間があったことで、運行ダイヤに支障があったが、都心まで電車1本で行くことが可能になり、通勤時間が大幅に短縮された。

多摩センター駅は、京王帝都電鉄が1974年に、小田急電鉄が1975年に開設し、多摩ニュータウンの玄関となることが期待されたが、開設があまりにも遅れたため、周辺には商業施設がなかった。そのため、住民はバスで聖蹟桜ヶ丘まで出るか、鉄道で永山方面に行くしかなかった。行政や鉄道会社は、多摩センター駅前の本格的な整備を迫られた。⁷

2000年1月10日には、多摩都市モノレールの『多摩センター～立川北』間も開業し、整備路線の全区間が開通いたしました。この全線開通により、多摩地区の交通利便性が一層向上したのみならず、多摩都市間の人の交流や地域の発展にも大きく寄与してい」⁸る。

第7章 文化財指定基準について¹

2023年2月15日に「東京都文化財保護審議会」の後藤治会長が「南多摩のメカイ製作技術」を「東京都指定無形民俗文化財（民俗技術）」に指定するべきだと答申し、3月2日に東京都教育委員会が正式に指定した（「はじめに」を参照）。

東京都教育委員会が示す「東京都文化財指定基準」の「第四 東京都指定無形民俗文化財」の指定基準は、次の通りだ。

（一） 風俗慣習のうち次のア又はイのいずれかに該当し、重要と認められるもの

- ア 由来、内容等において都民の基礎的な生活文化の特色を示すもので典型的なもの
- イ 年中行事、祭礼、法会等の中で行われる行事で、芸能の基盤を示すもの
- (二) 民俗芸能のうち次のアからウまでのいずれかに該当し、重要と認められるもの
- ア 芸能の発生又は成立を示すもの
- イ 芸能の変遷の過程を示すもの
- ウ 地域的特色を示すもの
- (三) 民俗技術のうち次のアからウまでのいずれかに該当し、特に重要なもの
- ア 技術の発生又は成立を示すもの
- イ 技術の変遷の過程を示すもの
- ウ 地域的特色を示すもの

「民俗慣習」と「民俗芸能」と「民俗技術」では、指定基準が異なることがわかる。

「南多摩のメカイ製作技術」は、「東京都指定無形民俗文化財（民俗技術）」に指定されたので、(三)のア「技術の発生又は成立を示すもの」、イ「技術の変遷の過程を示すもの」、ウ「地域的特色を示すもの」のいずれかに該当している、ということだ。

メカイが指定された理由について書かれた八王子市の「プレスリリース」（2023 年 2 月 15 日付）は「はじめに」で引用した。それによると、東京都教育委員会の示した基準でいうと、(三)の「ウ」（地域的特色を示すもの）に該当する。

しかし、指定は認定されるだけでなく、解除されることもある。

第二十七条 都指定有形民俗文化財又は都指定無形民俗文化財が都指定有形民俗文化財又は都指定無形民俗文化財としての価値を失った場合その他特殊の事由があるときは、教育委員会は、その指定を解除することができる。²

南多摩のメカイ製作技術も、技術が後世に伝わり続けないと、指定が解除される可能性があるのだ（第 9 章を参照）。

第 8 章 メカイ作りの取材¹

「はじめに」で書いたように、八王子環境フェスティバルで、八王子由木メカイの会の方々と知り合いになりました。そしてメカイに興味を持ち、メカイに関するいろいろな資料を読んでいるうちに、実際にシノが生えているところや、シノを刈るところ、シノの皮を「へぐ」ところや、メカイを作る方々の思いや考えを知りたいと思うようになりました。そこで、八王子由木メカイの会の共同代表の塩谷さんに、それらを見せてもらうことができないか、お願いしました。すると、快く承諾してくださいました。

そして、八王子由木メカイの会の共同代表の柚木さんが、2023 年 7 月 31 日に、八王子市別所にある長池公園で、シノが群生しているところ、シノを刈るところ、刈ったシノの皮を「へぐ」ところなどを、実際に見せてくださることになりました。こうして、現地取材へと至りました。

八王子由木メカイの会では、秋から春の期間に、週 1 回、八王子市堀之内にある「宮嶽谷戸」などでメカイを作っています。今回は夏なので、実際にメカイの製作を見ることはできませんでした。でも、2022 年と 2023 年の八王子環境フェスティバルの会場で、ヘネの編み方（ソコフミのやり方）を八王子由木メカイの会の方々に教えてもらった（「はじめに」の写真を参照）ので、それを思い出しながら書きます。²

柚木さんは、八王子由木メカイの会の他にも、「里山農業クラブ」と「長池里山クラブ」に所属しておられます。長池里山クラブは、主に長池公園の中で活動しています。³

1. シノ（篠竹、アズマネザサ）について⁴

シノは長池公園のあちこちに生えていますが、特に「築池」の近くによく生えています。

木とは違って腐らないシノは、成長しても皮を落としますが、たけのこの時は、成長すると皮が落ちるそうです。ちなみに、柚木さんは、他の人から「たけのこは苦い」と聞いたそうです。⁵

シノは、繁殖力が強いので、放っておくと藪になり、炭焼きに使うコナラなどの木が枯れてしまいます。⁶ そうなると、里山も荒れてしまいます（第3章1.を参照）。そうならないように、シノを伐採する必要があるのです。

現在では、シノが増えすぎて里山を荒らしていますが、昔は、メカイを作るために山からシノがなくなったため、シノ探しにも苦労していたようです（第3章3.を参照）。

シノは、やわらかく、芽が出ていないニイコ（第3章3.を参照）を使用します。芽は、笹の節から出ます。2年目以降のものは、かたくなるので、メカイ作りに適していません。基本的に、シノは1年で成長し、翌年そこからさらに成長することはほとんどないと言われています。節は、一度ついたらそこから芽が出るので、節の間隔はずっと同じです。したがって、節の間隔が短いシノは、最初からヘネとして使えないのです。

シノは、日当たりがよい場所ではよく成長します。すると、節が出やすくなり、そこから芽が出てしまいます。芽があるところは、固く、折れやすいため、メカイを作るのには適していません。だから、日当たりがよくない、できるだけ北側で西よりの場所、いわば「ウラナリのシノ」が、メカイを作るのにはちょうどよいのです。⁷

また、シノは水のある場所を好むので、長池公園のように池があったりすると、水分を含んだ、やわらかいシノが生えます。

シノや竹の太さは、生えた時からずっと変化しません。つまり、生えた時の太さが枯れるまでそのまま維持されます。しかし、細いニイコはたくさんあっても、太いニイコはなかなかありません。

ソコを作る時は、太いシノよりも、細いシノのほうが使いやすいのです。太くて丈夫なほうがよいと思いがちですが、太いシノで細いヘネを作ると、ミ⁸が抜けてしまい、逆に弱くなってしまうのです。高級品のジョウメズでは、細いヘネが必要です（第1章2.を参照）。ただし、太いシノは補強する部分に使えます。ニイコの太いシノは、縁巻き用に使う、貴重な素材です。⁹

2. シノを伐る（きる）

シノを伐採するときは、伝統的には「篠切鎌（しのきりがま）」という鎌を使います。この鎌は、元々、養蚕で桑の枝を切る時に使っていました。¹⁰ 今回は、剪定鋏（せんていばさみ）を使いました。鎌や剪定鋏で、地面にできるだけ近い位置から切ります。上のほうで切ると、材料の長さが短くなるほか、次に山に入った人が踏み抜く、つまり、足に突き刺さってしまい、危険です。特に、昔は今のようない靴はなかったので、もっと危険だったのです。¹¹

シノは、伐採したら2～3年待たないと生えてきません（第3章3.を参照）。そのため、里山農業クラブでは、伐採するシノの土地をいくつかに分けて、年ごとに伐採する土地を変えています。つまり、計画的にシノを伐採することが重要なのだそうです。このやり方は畑の使い方と似ていると思いました。畑も、植物に栄養を取られて、いわば「やせて」しまうので、数年に1回くらい休ませます。このようなやり方をするのは、一度にすべてのシノを伐採すると、来年、再来年の材料がなくなるからです。

細いニイコは、比較的たくさん生えていましたが、縁巻きの作業で使う太いニイコはなかなか見つかりません。今回は、梅林の近くの藪に入って、太いニイコを探して刈って

きました。それでも、あまり太いほうではないそうです。



シノを刈るために雑木林へ入っていく。右端の写真は剪定鋏でシノを刈っているところ。

2023 年 7 月 31 日 長池公園で撮影

3. ヘネを作る・ヘネを編む

今回は、シノを刈ってからすぐにヘネヘギをしていただきましたが、実際には、シノ刈りをしてからヘグまで間があくことがあります。

四つ割りしたものを直ぐにヘガない場合は、陰干ししてから保管する。これを割干しという。水分が多いままだと、カビが生えたり、色が悪くなって使用できなくなる（中略）割干し保管したものをヘグ場合は、事前に一晚水につけて戻しておく。乾燥したままではうまくヘゲない。縁巻き用の太いシノは 2～3 日の水つけが必要となる。¹²

湯ならもっとやわらかくなります。ただ、昔はヘネのために湯を沸かすことはできなかったことでしょう。火を起こすには、当時は山から薪を取ってこなければならず、ヘネをやわらかくするためだけに薪を消費するわけにはいかないからだと思います。

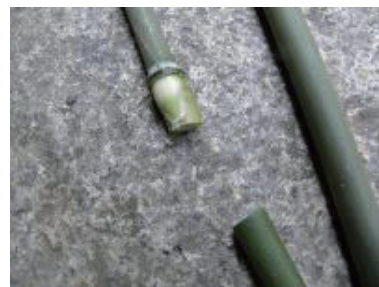
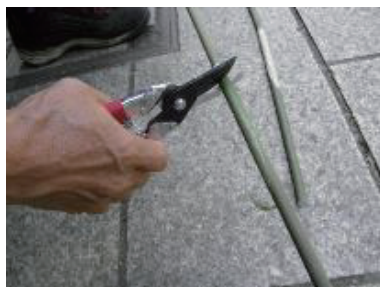
『多摩市史』には、「二、三日日陰に置いておいて少し乾燥させることをネダマセルといった。このヘネの状態にすると長くもたせることができる。」(p. 166)、『新八王子市史 由木の民俗』には、「四つ割りまでしておけば、また水に浸せば篠は使える。」(p. 113)、『メカイの作り方』には、「長期間保管する場合は、割り干し（四つ割り・日陰乾燥）してから保管する。」(p. 11) と書かれています。農作業があつて春までメカイを作る人や、年中メカイを作る人など、メカイを作る期間は人それぞれです。その期間に合わせて、シノの保管期間を変えているのだと思います。年中メカイを作る人は、次にシノを入手するまで、長期間保管していなければいけないはず。だから、シノの長期保管は、メカイの黄金期には重要なことだったのだと思います。¹³

ヘネは、メカイの大きさにもよりますが、標準サイズ（ヘネの数が、底 14 本、上 5 本）であれば、55～60 cm の長さになります。この時、長池里山クラブの本拠地である、長池公園の「里山のいえ」の前の通路のタイルの長さが 60 cm くらいなので、最初のシノはこのタイルに合わせて切ります。その後は、最初に切ったシノに合わせて切っていきます。

かつては、「その都度長さをはかって切るのは手間がかかるので、モノサシ代りにシノ竹を切ったものを用いた」¹⁴ こともあったようです。モノサシのシノを「長いシノにあてて、五本でも十本でも一度に切れる分量にまとめてオシギリ（中略）で切る。オシギリはワラを切るのと同じ物である」¹⁵ そうです。ただ、「押切は非常に危険なので、未経験者は絶対に使用してはならない。きちんと教わってから使用する。」(p. 11)、「子供のいる所では使用しない。」(p. 13) という注意事項が『メカイの作り方』に書かれています。

次に、シノを縦に 4 つ割りに切ります。この作業では、メカイ包丁を使用します。八王子由木メカイの会では、メカイ包丁は特別注文しています。越前（福井県）にある刃物業者から 1 本 6500 円で買っているそうです。この刃物業者に頼んで刃を研いでもらう人もいますが、柚木さんは、自分で研いでいるそうです。

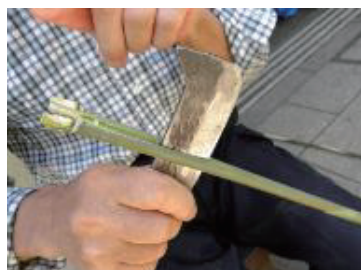
シノを縦に割る時は、節（芽）の部分から切り始めます。中間部から切ってしまうと、割れてしまうからです。上から十字に切っていくのですが、メカイ包丁を動かしてシノを切るのではなく、シノを動かして切っていきます。そのほうが、刃の先にある手を切らないからです（写真参照）。以下の写真はいずれも 2023 年 7 月 31 日に長池公園で撮影しました。柚木さんの承諾を得ています。



左: 刈り取ったシノ（2 m 以上ある）。細めのシノ（左）と太めのシノ（右）

中: 刈ってきた長いシノを 60 cm に切る。今回は剪定鋏で切っています。

右: 芽（節）がある近くを切る。



左: 芽のところにメカイ包丁で切り込みを入れる。

中: メカイ包丁で切る。シノの先から根本に向かって切る。

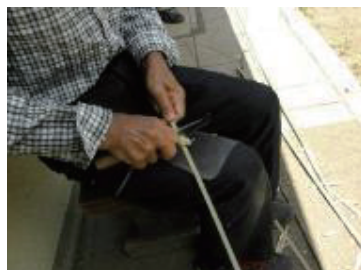
右: 四つ割りにしているところ。



左: シノをメカイ包丁に押し付けていく感じで切る。メカイ包丁で手を切らないためです。

中: シノを口にくわえて割く。『新八王子市史 由木の民俗』に「口でヘネの先をくわえたり、顎に挟んだりして剥がす」（p. 113）と書かれています。

右: フチマキ用の太めのシノをへいでいるところ。かなり力がある。シノをメカイ包丁に押し付けていく感じで割いています。



左: 太めのシノは、杭などに押し当てて割ることもできます。『新八王子市史 由木の民俗』に「フチマキ用の篠は（中略）力の要る仕事だったが、杭に押し当てるようにしながら割ると、女性の力でもできるということが分かった。」（p. 112）と書かれています。

中：割った太めのシノの肉をメカイ包丁で削り落としているところ。

右：ズボンが破れないようにするため、ズボンの上に小さなマットを敷いている。

また、ある程度切り込みを入れたら、近くの杭に挟んで、シノを動かして割ることもできます（前のページの写真）。節と節の間の部分はスムーズに切れますが、節の部分はかたいので、メカイ包丁を動かして丁寧に切ります。ちなみに、一本枝が出ると、そこから 180 度回転したところから次の枝が出ます。つまり、枝は、互い違いに出る、というわけです。

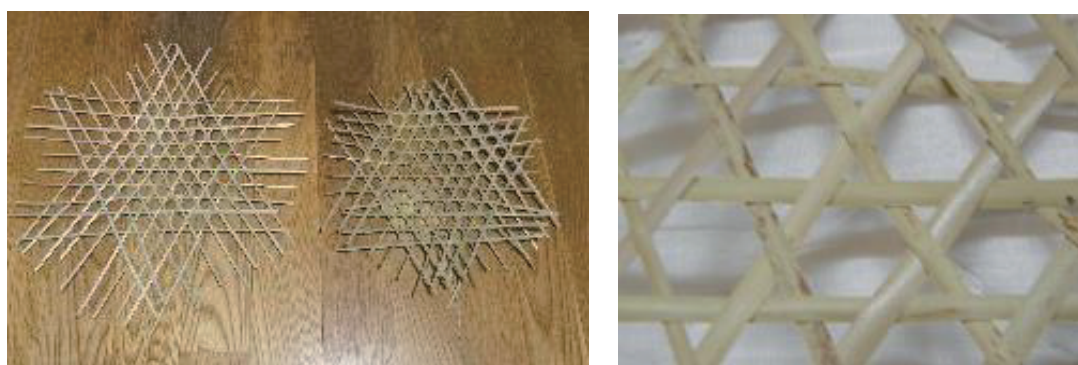
切ったら、向きを 90 度回転させて、同じように切っていきます。その時、「最初に二つ割りにしながら最後は割らずに残しておく。すると端が固定されてバラバラにならない」そうです。¹⁶

終わったら、4 本ともそれぞれ皮をへぎます（「へぐ」の意味は、第 3 章 3. を参照）。この時に、幅が 2~3 mm くらいになるようにへぎます（図 1）。メカイ包丁の刃のついたほうの角の丸みを帯びた部分で削ります。薄くして、厚さを均等にするためです。



図 1 メカイ包丁。先の上は「ツノ（角）」、下は丸みを帯びている。

ここからは、へネの編み方です。このようにしてできたへネを使って、次はソコ（「シキ」ともいう）¹⁷ を作ります。この作業を「ソコフミ」といいます。¹⁸



左：2022 年と 2023 年の八王子環境フェスティバル会場でぼくが編んだソコ、右：拡大写真

ソコは、へネを三本ずつ、隙間が正六角形になるように組みます。「この編み方をロッカクメド」¹⁹ といいます。つまり、へネどうしの角度が 60 度になればよいのです（次のページの図 2）。1 本のへネを通すごとに、60 度回転させてから次のへネを入れます。4 番目以降のへネは、前のへネの上に通します。

通すだけでなく、常に最初の形、つまり「上になる」「下にする」という組み替えをします。最初の正三角形の形のように、「上に出ている」状態と「下になっている」状態を、交互にさせます（上の拡大写真を参照）。この作業は、後になればなるほど複雑になります。

次に、「横回し」という作業に入ります。立ち上げたへネの側面に、ソコフミに使ったへネと同じへネを差し込んで、胴を作ります。

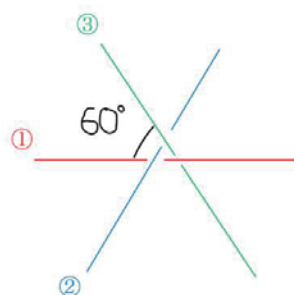


図 2

次に、「縁巻き」の部分を作ります。へネを作ると、シノの内側の部分が余ります。これを「へネガラ」と言います。²⁰ 余りなので、捨てるか、昔なら燃料にした場合もありますが、ニイコの太いへネのへネガラは、この作業で使します。へネガラを輪にして、その上から、通常 2 m 以上を目途に作った太いへネを 2 巻きします（下の写真）。編んだメカイの周囲の 5 倍程度の長さが必要で、1 本で足りないときは、へネをつなげることもあります。



左: フチマキ（太めのへネで巻かれている）、右: フチマキの芯のイメージ

次に、「筋入れ」です。力骨（または「力竹」）と呼ばれる竹のへネ（竹ベネ）を「三本放射状に入れ」²¹ます。竹ベネには、真竹または孟宗竹という竹を使います。多くの場合、真竹を使いますが、今回は「里山のいえ」の中に保管されていた孟宗竹を使用しました。孟宗竹は、節にあるこぶが 1 つですが、真竹はこぶが 2 つなのが違いです。²²

まず、孟宗竹を縦に割ります。堅そうに見える竹ですが、縦に割る時は、少し切り込みを入れると後は自然に割れていきます。縦に割った後、縁のほうを切ります。切った状態の竹は、外側は丸く、内側は平らになっています。平たい面をメカイ包丁の刃で削って薄くします。丸いものを切ったので、



図 3

このような形をしています。次に、内側のザラザラした平らな部分、「肉」と呼ばれる部分をメカイ包丁で削って、肉を取り除きます。メカイ包丁の先の下部分は、丸くなっていて、丸く削る時に使います。この部分で内側の平らな面をこすって、



図 4

このような形にします。曲げるところは特に薄くはいで、やわらかくします。そうしないと、割れてしまいます。最後に、竹の棒、つまり「竹ベネ」の両先端を三角形になるように削り（次のページの写真）、差し込みやすくしてからメカイの底に差し込みます。



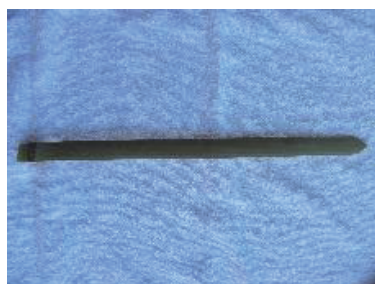
左: 孟宗竹をメカイ包丁で割る。

中: 少し切り込みを入れると後は自然に割れてゆく。

右: 割った後の孟宗竹。



左、中: 竹の肉を削ぎ取る。右: 削ぎ取った竹の肉。



左: 削ぎ取った後の孟宗竹。これを力骨にする。右: 差し込みやすくするために、先は三角形にする。

力骨は、幕末に田口久兵衛が由井村から学んだメカイ技術に付け加えたもの（第2章1.を参照）で、補強するために必要です。柚木さんは、作る作品の立ち上がりに合わせて、丁寧に曲げることを心がけるべきだと考えています。そうすることで、きれいに見えるそうです。そのためにも、きちんと、丁寧に削って曲げる必要があります。

これらの作業を終えたら、最後に「シリカガリ（尻かがり）」または「シリッカガリ（尻っかがり）」と呼ばれる作業に入ります。²³ ソコフミのヘネが立ち上がっている角を、細いヘネで2巻きします。

4. 柚木さんから聞いた話

柚木さんが子どもの頃は、北海道小樽に住んでいて、親が農業をしていたので、農業についての知識があります。

柚木さんは、夏は毎週火曜日と土曜日に、田んぼや畔（あぜ）の雑草を刈る仕事を、所属している長池里山クラブで、ボランティアとして活動しています。

長池公園にある田んぼ（次のページの写真）の一部は、近隣の小学校が米作りの勉強をするために使っています。²⁴ この田んぼでは、古代米やうるち米を育てています。



長池公園「体験ゾーン」の水田。雑木林に囲まれているので日当たりがあまりよくない。

稲は中から成長します。葉は 13～14 枚出て、全て出るとそこで成長が止まります。

田んぼなどの面積を数える時に、昔からの日本の単位を使うことがあります。広い順に「町（ちょう）」、「反（たん）」、「畝（せ）」、「歩（ぶ）」、「坪（つぼ）」です。1 町は 10 反（じったん）、1 反は 10 畝（じっせ）、1 畝は 30 歩、1 歩は 1 坪と同じで、1 歩と 1 坪は 3.3 (1.8×1.8) m² で、畳 2 枚分です。

柚木さんは、炭焼きもやっています。炭焼きは、12 月にコナラなどの木を切って、1～3 月の間に行います。特に、温度の見極めが難しいそうです。炭焼きは、昔は養蚕のために行っていました。蚕は、温かい場所でないと育たないので、炭で暖房代わりにしていたのです。ちなみに、野生の蚕はいません。全部、人間が育てたものです。

太いシノを探しに行く途中、「里山のいえ」の近くの山の中に、等間隔で並んだ梅の木がありました。1 本 1 本に番号がついています。長池里山クラブが管理しているもので、番号は、長池里山クラブの人たちの受け持ちの番号です。1 人 1 本の梅の木を管理しているそうです。梅の枝の切り方や、実のなり方などを勉強するのに使っています。剪定の仕方によって、次の年の花のつき方や実のなり方が変わるそうです。

■コラム 長池公園

1. 長池公園とは何か

長池公園は、「農業用のため池としての役割を担っていた『長池』と『築池』を中心に配し、これらを取り囲むように小川や湿地、そして広大な雑木林が残された、面積 20 ha の自然保全型公園」¹ だ。貴重な動植物の保全の場でもある。公園の名前の由来となった長池には浄瑠璃姫の伝説も残されている。

今から 700 年ほど前、海の中に三日三晩光るものを見つけた相模国の漁師たちは、船を出してそれを引き上げた。それは、木でできた薬師如来の像だった。岡崎（現在の愛知県岡崎市）を治めていた岡崎四郎という武士の館に引き取られた。子がいなかった四郎とその奥方は、子どもが欲しいと毎晩薬師如来の像にお願いしていた。すると、二人の間に女の子が生まれ、四郎はその子を「浄瑠璃姫」と名付けた。

やがて、浄瑠璃姫は武蔵国の小山田（現在の東京都町田市）を治めていた小山田太郎高家の元へ嫁ぐことになった。そのとき、浄瑠璃姫は薬師如来の像も一緒に連れてきた。しかし、結婚して間もなく夫は戦に出かけてゆき、自分の大将を守るために討ち死にした。主を失った高家の人々は敵から追われ、浄瑠璃姫も薬師如来の像を背負いながら逃げた。

ようやく長池に着くと、高家の後を追うように薬師如来の像を抱えたまま池に飛び込んだ。²

このような伝説が残っているということは、長池は鎌倉時代から存在していたことになる。小山田太郎高家は実在した人物で、東京都町田市の大泉寺に墓が残っている。1336年に小山田太郎高家は、足利尊氏勢から大将・新田義貞を救うため、湊川の戦いで義貞の「替え玉」となって討死した。その後、小山田領（町田市）は北条得宗家勢に攻められた。実は、この物語には続きがあり、それは、次の通りだ。

時が流れ、別所（現在の八王子市）の蓮生寺というお寺のお坊様が長池のほとりを歩いていると、池の中に光るものを見つけた。引き上げてみると、それは浄瑠璃姫と一緒に池に沈んだあのお薬師様だった。お坊様は、お薬師様を寺に持ち帰り大事にお祀（まつ）りすると、長池に身を投げた浄瑠璃姫とその侍女十三人が、安らかに眠ることができるよう、お祈りした。³

蓮生寺は、現在も残っている寺だ。その薬師堂に、薬師如来の象が祀られている。

『八王子市史叢書 5 八王子写真民俗誌』によると、長池は「天然池と推測される」(p. 149)。一方で、「長池下流にある『築池』は人工池で、農業用の溜池として利用されていた。」(p. 149)

この公園のテーマは、「里山文化の継承と創造」だ。この地の風土を育んできた人々が、長年にわたって受け継いできた雑木林と長池・築池、そして東京の四谷見附から移築された長池見附橋（詳しくは、下の「長池公園の歴史」を参照）と、新たにデザインされた姿池の調和が、都市における人と自然の新しい共生の形を象徴している、という意味だ。



左：長池公園と長池見附橋、右：築池と雑木林

2. 長池公園の歴史⁴

1820（文政3）年に作られた『武蔵名勝図絵』（植田孟）によれば、文政の頃、当地内に「ぬなわ」（＝ジュンサイ）、「河骨」（＝コウホネ）という水草が繁茂していたことが記されている。

1959年9月20日には、浅川流域文化財総合調査の一環から、本田正次・畔上能力両氏を中心に、長池地域の植物現地調査が実施された。

1961年には、新たな発見があった。

南多摩文化財総合調査報告第1分冊－多摩丘陵の文化財－『多摩丘陵植物調査報告』

（東京都教育委員会 1961）において、「由木村長池は、水生ならびに水湿地の植物に富み（中略）特にジュンサイ・ミズオトギリ・サワギキョウの3種は、練馬区上石神井の三宝寺池が唯一知られた生育場所であったことから、これに次ぐ水生植物の産地として貴重な箇所である。」との特記事項が記載される。⁵

しかし、その貴重な長池も、1967 年には、干ばつによって全ての水生生物が消滅してしまった。

その後は、干ばつもあってか、自然保護を呼びかける文書や活動が活発になった。1969 年に、「多摩ニュータウン開発地域の植生学的研究」（宮脇昭・日本住宅公団）により、長池・蓮生寺周辺緑地保存の必要性が提言され、1972 年、「東京及びその周辺のハンノキ林」（鈴木由告・新井二郎）により、長池のハンノキ林の重要性が指摘されている。

1975 年、「八王子市自然友の会」が、東京都都知事宛に、多摩ニュータウン地域内に自然を残すための要望書を提出し、湧水池と湿生植物の保護を訴えた。

1978 年、「多摩ニュータウン B-4 地区蓮生寺・長池周辺保全整備計画」（日本住宅公団）が策定され、市民団体を交えた保全整備計画委員会が発足した。また、長池ハンノキ林が環境省特定植物群落に指定された。

1979 年から 1982 年にかけて、住宅都市整備公団（現・都市機構）と八王子市自然友の会が、別所谷のカタクリを 1000 株ほど移植した（1983～85 年にかけても実施された）。このカタクリは、現在は数千株に増え、早春に林縁をピンク色に染めている。

そして、1993 年に長池見附橋が移築復元された。

四谷見附から移築された長池見附橋とは、もとは四谷見附にあった「四谷見附橋」で、1913（大正 2）年に、現在の JR 四ツ谷駅にできた橋だ。迎賓館や、その付近の風景との調和をはかるよう、フランス風クラシック調のデザインに設計された。

その後、街道となったのだが、それまでの新宿の街道は、防御上の配慮によって「コの字型」に造られていた。しかし、明治時代になると交通の障害となったため、東京市が 1911（明治 44）年にこの橋の工事を着工させたのだ。⁶

1991 年 10 月に、この橋は架け替えられたが、都内最古の橋であったことから保存活用が決定し、1993 年に長池公園に移築復元された。⁷

1999 年に体験ゾーンにおける里山活動を担う市民活動団体「長池里山クラブ」が発足し、2000 年に公園が開園した。開園後の 2001 年には、体験学習施設・長池公園自然館（長池ネイチャーセンター）も開館した。この自然館では、長池里山クラブの展示や、メカイの展示・販売も行われている（第 9 章の写真を参照）。

長池里山クラブは、長池公園内の「里山体験ゾーン」を活動拠点にしている。⁸

第 9 章 メカイの今後

1. 「東京都指定無形民俗文化財（民俗技術）」に指定されて

南多摩のメカイ製作技術が、「東京都指定無形民俗文化財（民俗技術）」に指定されたことを受けて、八王子由木メカイの会共同代表の塩谷さんは次のように語っている。

メカイが東京都の無形民俗文化財・民俗技術に指定されました。（中略）名誉ある都の第一号です。（中略）故人となった金子治男さんや平方勝次さん等を師とし、会員の皆さんが 20 年間、技術習得・普及活動に励んできた成果であり、共に喜ぶたい¹

「師」である金子さんと平方さんが立ち上がり、会員の方々が技術の習得や普及活動に励んできたからこそ、民俗技術として指定された。様々な人々、特に、師匠のおかげで、指定に至った喜びの気持ちがあふれ出ている。

『タウンニュース八王子版』（2023 年 3 月 23 日号）が八王子由木メカイの会を取材した記事では、次のように書かれている。

八王子由木メカイの会の会長塩谷さんは、今回の指定を受けて、「やっとか、という気持ち。南多摩地域に残る伝統的な文化であるが、誰かが伝承していかないとたちまち途絶えてしまう」とうれしさ半面、危機感も募らせた。

今まで指定に向けて活動してきたのに、20 年間、何にも指定されなかったため、やっと普及活動団体として認められた、という気持ちだと思う。

八王子由木メカイの会共同代表の柚木さんも、「指定されても、担い手がいなくなれば指定を取り消されてしまう」とおっしゃっていた。²

2. メカイ製作技術を伝承するために

第 4 章の終わりのほうで、「次の世代へ伝統技術を伝えることは、はたして簡単なことなのだろうか。これについては、第 9 章で考える。」と書いた。ここではこれを考える。

塩谷さんは次のように述べている。

この民俗技術を継承・保存する団体として我が「八王子由木メカイの会」が認定されました。今後はいっそうの普及啓発活動が期待されますので、地域や八王子市等と協力しながら、がんばりましょう³

文化財に指定されることがゴールではなく、指定されたことで、今まで以上にメカイの普及と啓発（「知識をひらきおこし理解を深めること」『広辞苑 第七版』）をしなければならないのだ。

メカイの製作技術は、大きく 2 つに分かれる。

- (1) メカイの材料（＝ヘネ）を作る段階の技術
- (2) メカイを編む技術

具体的には、(1) には、材料であるシノや竹についての知識、シノの刈り方、シノや竹の割り方、シノや竹のへぎ方などが含まれる。一方、(2) には、ソコフミ、ヨコマワシ、フチマキ、シリカガリ、筋入れなどのやり方などが含まれる。

このうち、(2) については、例えば第 5 章 5. や第 6 章 2. で紹介したように、宇津貫や多摩では、荷造り用のカラフルな紐やクラフトバンドを利用して作ることも行われており、地元の中学校で編み方の講習会が開かれたりしている。もちろん、八王子由木メカイの会でも、八王子環境フェスティバルの会場でソコフミのやり方を来場者に教えるという活動を行っている（「はじめに」を参照）し、地元の小学校でメカイの実演会なども行っている。⁴ このように、(2) の技術の伝承は、比較的順調に行われる可能性がある。

たしかに、籠の編み方を伝承させるだけなら、紐でも代用できる。しかし、八王子由木メカイの会では、里山の自然を守ることが大きな目的であり、その里山の環境を荒らすシノを伐採するために、シノを利用している（第 4 章 3. を参照）。

プラスチック等の新素材の発明で竹は使われなくなったため、裏山の竹は暴徒と化し、「破竹の勢い」で、裏山の斜面を駆け登って勢力をのばしている。このまま放置すれば 22 世紀には竹のためかなりの里山は消滅する。⁵

この引用箇所では竹について書かれているが、「シノ・竹類は“破竹の勢い”（中略）で繁殖」⁶ する（第 3 章 1. を参照）ので、シノも同じだ。もし (2) だけを伝承させたら、シノや里山とのつながりがなくなってしまう。「東京都指定無形民俗文化財（民俗技術）」

である「南多摩のメカイ製作技術」を保持するためには、どうしても (1) の技術や知識の伝承も必要である。この点について、塩谷さんは次のように語っている。

シノでない材料で編む (の) は、一般的な (意味での) 六つ目編みで、メカイではありません。(そのような六つ目編みの籠などは) 竹、ツタ類、ヒモ類等、全国で一般的に行われています。メカイ製作技術が文化財に指定されたのは、材料がシノで、材料のヘネの作り方も独特だからです。⁷

この言葉から明らかなように、無形民俗文化財としてのメカイ製作技術では、(1) がより重要であることがわかる。

ところが、(1) の技術の伝承は簡単ではない。その主な原因は次のとおりである。

- ・「危険を伴う野外作業が必要なこと、ナタやノコギリなどの刃物を使うので傷害の危険があること」⁸

- ・メカイ包丁でへぐ時に、「シノを持つ左指 (親指と人差し指) を包丁で切りがち」⁹ であるなど、メカイ包丁の扱いには危険が伴うこと。

- ・開発などにより、材料となるシノが確保しづらい。シノは「公有地にも生えているが無断採取をしてはならない」¹⁰ こと

- ・シノを伐るために、雑木林の草がたくさん生えているところ、害虫や毒蛇がいるかもしれないところに入らなければならないこと (第 8 章の写真を参照)

これらの問題は、その人の好み (虫が嫌い) や、社会的な事情 (開発によりシノの生息地がなくなる) などが関係するため、簡単にクリアすることはできない。仮に、これら全てがうまくいったとしても、(1) の技術をマスターするには約 10 年かかると塩谷さんはおっしゃっている。

このように、メカイ作りの未経験者が (1) と (2) の全工程をマスターするのは、簡単なことではない。柚木さんによると、刃物が苦手途中で講習会をやめてしまった人がいたり、シノ伐りやヘネ作りには興味がなく、ただ籠を編むことだけに興味を持っている人が多かったりするそう。¹¹ 市民や小中学生向けの講習会では、時間の制約もあるので、(2) だけが行われるのがふつうだ。

今回実際に柚木さんがシノや孟宗竹を割ったり削ったりしている作業を見て (第 8 章を参照)、慣れていないと、メカイ包丁で手などを切っけがをするかもしれないし、へいでいる途中でシノや孟宗竹を折ったりするかもしれないと思った。

本物を目指して、材料の「しの竹」切りからやるのは残念ながら到底無理です。講座では、講師陣ですべての材料を事前に用意して、籠を編んでもらいます¹²

「到底」とアクセントを強めているのは、シノ伐りからメカイの技術を全て伝承させたいという気持ちはあっても、それは様々な理由でできない (上記参照) 悔しさがあるからだと思う。メカイ技術を全て伝承させるためには、編むだけでなく、シノを伐るところから始めなければならない。しかし、実際にやってもらうのは難しい、という危機感を持っているのだと思う。

だから、ぼくが体験した八王子環境フェスティバルでのメカイ編みでも、メカイ包丁は使わず、ヘネを編む作業 (つまり、(1) ではなく (2)) だけ行ったのだと思う。また、フチマキやヨコマワシなどもやると、時間がかかる。だから、あらかじめ用意された材料 (ヘネ) を使って、ソコを編むだけに限定されているのだ。

編むことだけが好きな人はたくさんいる。それに、実際にメカイを作った「気分になり

たい」という人もいるはずだ。ということは、それだけシノをたくさん刈って来て、ヘネを作っておかなければならない。すると、ただ編むだけの人は、シノを伐ってヘネにする大変さを知ることができない。だから、メカイの編み方、つまり (2) は伝承できても、シノの伐り方と大変さ、ヘネの作り方と大変さ、つまり (1) は伝承されにくいと思う。

(1) も (2) もできるようになるためには、八王子由木メカイの会に入会して、本気で技術習得を目指さなければならない。実際、八王子由木メカイの会は、次の活動をしている。

定例活動：製作技術の習得・継承・技術向上（材料作りから仕上げまで）・新製品開発・里山保全

（注：活動の）期間 10月～4月（材料のシノの伐採適期）

日時 毎月の第1日曜日、第2～第5木曜日、午後1時～4時、屋外の場合は9～15時

場所 由木中央市民センター、宮嶽谷戸（堀之内里山保全地域）、長池公園など

内容 活動にはメカイ包丁、剪定バサミ、枝切り鋏、ナタ、ノコギリ等の刃物を使用する。技術継承には材料のヘネ作りが不可欠と考えており、かなりの経験を要する。¹³

ぼくは、ソコを編む作業を2年（2回）やらせていただいたことになる。普及には到底及ばないかもしれないが、編む作業の知識・手順を理解したという意味では、ほんのわずかでも、啓発活動になったのかもしれない。シノを伐るところからは体験していないが、柚木さんに取材させていただいた時は、シノを伐るところから勉強できた。知識として、少し伝承されたかもしれない。

3. 八王子の2つの伝統文化

ところで、「八王子車人形」が、2022年に国の重要無形民俗文化財に指定された。¹⁴ 八王子車人形は、日本遺産「霊気満山 高尾山 ～人々の祈りが紡ぐ桑都物語～」の「構成文化財」に組み込まれている。日本遺産として登録されるための条件として、必ずストーリーであることに加え、次の条件もある。

ストーリーを構成する文化財群は地域に受け継がれている有形・無形のあらゆる文化財が対象で、地方指定や未指定の文化財を含めることも可能ですが、国指定・選定のものを必ず一つは含める必要があります。¹⁵

ストーリーに含まれている文化財が「構成文化財」である。

八王子市は、「高尾山を中心に据えて、桑都物語」を作った。¹⁶ かつて八王子は、養蚕や織物産業で栄えていた。生糸を取る蚕のえさは桑の葉である。そこで、八王子の畑では、桑がたくさん植えられていて、「桑都」と呼ばれていた。その桑都の発展を支えた養蚕農家や絹商人は、人々が霊山として崇めてきた高尾山を信仰し、大切にしてきた。だから、日本遺産の桑都物語では、高尾山と八王子の養蚕産業とは切っても切れない関係にあると捉えている。

しかし、残念ながら、この構成文化財に、メカイ技術は含まれていない。それは、メカイと高尾山とのつながりが見当たらないからだ。

しかし、第1章2.で述べたように、メカイには養蚕用具のメカイも含まれていた。だから、「メカイ→養蚕→高尾山」というつながりがある。したがって、メカイと桑都は、直接つながっていたと言えるのだ。たとえ高尾山との直接のつながりがなくても、メカイも桑都の一部を占めているのには違いないし、八王子の伝統文化の1つなのだ。だから、構成文化財の1つであると言えると思う。

4. メカイ技術が後世に伝わっていくために

柚木さんは「仮に新しく会員が入会した場合、今度はその人のためのメカイ包丁などの道具が必要となります。そのための資金も必要になります」とおっしゃっていた。¹⁷ 資金の調達に関して、八王子由木メカイの会は、民間企業が作った環境財団の助成金に応募した。その結果は、2024年2月に発表されるそうだ。

『多摩町誌』(p.468–p.469)で引用されている、昔の『東京府史』に、次のようにすれば「竹細工」(メカイ)が発展するのではないか、と書かれている。

- 一、竹細工製造伝習会を開くこと
- 二、原料品の共同購入をなすこと
- 三、製品の共同販売をなすこと
- 四、品評会の開催
- 五、特に、新趣向の製品の製作を奨励すること

このうち「一」については、本章2.で書いたように、現在、八王子由木メカイの会が後継者を育てているし、市民講座、小中学校、環境フェスティバルなどのイベントで、実際に講習会が開催されている。

次に「二」については、現在はシノの購入はないため、「入手」となる。共同で入手することは、すでに行われている。昔は、一人でシノを伐っていたのだろう。しかし、現在では保存団体ができて、団体の人たちでシノを入手していると言える。

「三」については、『東京府史』の頃はメカイが商品だったのに対し、現代では残念ながら、商品として流通させるのは難しい(第2章4.を参照)。しかし、八王子由木メカイの会は「イベントにおける実演・体験・販売等の普及活動」¹⁸を行っている。売上金は、主に活動資金にあてているそうだ。

ぼくは「四」をすることで、メカイが今後発展すると思う。品評会は、人を集めて、関心を持ってもらうよい機会だと思う。そのためにも、専門家だけでなく、一般の人も参加できるようなイベントにすればいいと思う。

「五」のように新しいメカイ¹⁹を作っていくと、伝統的なメカイがなくなってしまうかもしれない。しかし、新しいメカイを作り出さないと、伝統的なメカイは廃れてしまうかもしれない。廃れても、伝統的なメカイだけを作り続けるのか、それとも、新しいメカイを作り始めて、廃れないようにするのか。つまり、多くの人の関心を集めようとするのか。このように、それぞれによい面と悪い面がある。このことについて、塩谷さんと柚木さんは次のように述べている。²⁰

伝統は時代に応じ変化していくものです。変化しなければ伝統は途絶えてしまいます。

(しかし)「主材料がアズマネザサ(シノ)であること／編み方が六つ目編みがメイン」だけは不変です。メカイでなくなります。(中略)シノの材料(ヘネ)を作るのは大変ですから、紙やプラスチックで六つ目編みを練習したり、メカイ編みを学んだりするのは一つの方法です。しかし、それをメカイというのは間違いです。シノ以外で編んだ六つ目編みをメカイという方は、八王子にはいないと思います。目籠／めかごと呼ぶ方はいると思います。一般的に目の粗い籠はこう呼ばれています。メカイも目籠の一種です。²¹

基本を守ったうえでの工夫であり、時代の変化への対応です。(ただし)伝統的な「メカイ」技術の継承が大前提です。²²

どちらも、時代への変化に対応しなければ、メカイ技術は廃れてなくなってしまうが、シノを材料としない「目籠」は、「メカイ」とは言えない、という考えだと思う。里山農業クラブ・八王子由木メカイの会にとっては、メカイは、里山を荒らすシノを刈って里山を守るために作るもので、シノを使わなければ意味がない。

ぼくが、八王子市生涯学習センター（クリエイトホール）のイベント「青少年講座『伝統芸能に触れてみよう！ 八王子車人形体験講座』」²³に参加したとき、「八王子車人形 西川古柳座」の五代目家元の西川古柳さんは、「伝統にこだわりすぎると、車人形はいずれ廃れてしまう」とおっしゃっていた。そこで、様々な新しい試みをしている。

五代目（注：西川古柳さん）は落語やバレエなどとのコラボレーション公演や海外公演なども積極的に行い、また子供たちへの指導など後進の育成にも力を入れている。²⁴

実際、クリエイトホールでの体験講座でも、南米の踊り子の車人形を動かす体験もした。



左：新タイプの車人形、右：伝統的な車人形（2022年8月11日 八王子市生涯学習センターで撮影）

見る人によっては、左側の写真は「車人形ではない」と思うかもしれない。しかし、もし車人形を海外で上演した場合、その土地の踊り子が車人形として演じられると、きっと観客が喜ぶだろうと思う。これはちょうど、日本の伝統的な楽器である琴で、西洋音楽を演奏するのと似ている。逆に、西洋の楽器で「夕焼小焼」のような伝統的な日本の歌を演奏するのを聞いたとき、日本人の観客が大喜びするのと同じだ。

だからといって、どんどん新しいものに変化させていくと、本来の伝統スタイルへの関心が薄れてしまう。さらに、新しいほうに興味を持っても、結局、伝統的なものには興味を持たなくなってしまうかもしれない。だから、「基本は伝統的なメカイを保存・普及させる」という考え方で伝承させることが第一だと思う。

東京都が指定した技術とは、あくまでも「伝統的な」メカイの技術だ。したがって、新しく変化させた「目籠」は、関心を集めたとしても、指定されたメカイ技術のうちには入らないはずだ。

塩谷さんは次のように述べている。

我々のメカイ製作技術の原点は里山農業クラブによる里山の自然を守る活動にあり、金子師匠の提案がなかったらメカイ発祥の地、八王子からはメカイ技術が消滅していたのです。そして20年来の我々の活動がなかったらメカイ製作技術が文化財（民俗技術）に指定されることはなかったでしょう。²⁵

つまり、「里山の自然を守る」というところが、重要だと思う。里山農業クラブの基本理念は「農なくして里山なし」だ（第4章2.を参照）。シノは放置したらどんどん増えて（第3章1.を参照）、シノが里山を覆い尽くしてしまい、他の植物が育たなくなる。そこで、「シノを刈り取って駆除するのではなく、地域の民俗伝統技能を活かし、昔のように上手に利用していくことを考え」²⁶て、いわば一石二鳥の発想で、メカイ作りを始めたのだ。

さらに、刈ったシノをゴミにはせず、資源循環型社会をめざして、再利用しているのだ（第4章 2., 3. および「コラム 資源循環型農業」を参照）。

昔は、貧しい農家が、現金収入を求めて、副業としてメカイを作っていたのに対し、現在は、里山農業クラブなどの人たちが、里山の自然の保全と、メカイ技術が後世に残ることを求めて、ボランティアでメカイを作っている。

今までの伝統を引き継いで後世に残すことは、何十年、何百年と里山を守ってきたことにつながるのだ。理屈のうえでは、次の4通りが考えられる。

- (1) 里山の自然も保持し、メカイ製作技術も保持し続ける。
- (2) 里山の自然は保持するが、メカイ製作技術を保持することはあきらめる。
- (3) 里山の自然を保持することはあきらめるが、メカイ製作技術は保持し続ける。
- (4) 里山の自然を保持することも、メカイ製作技術を保持することもあきらめる。

一番簡単なのは (4) だ。何もしなければよいからだ。

逆に、一番大変なのは (1) だ。活動し続けなければならないからだ。

(2) は、本来の目的は達成できるが、伐ったシノを有効活用できない。(3) は、里山があることを前提にしなければならない。もし、住宅開発で里山がなくなったら、シノを入手することはできないため、メカイを作ることができない。

塩谷さんがおっしゃるように、「何もしなければ文化はあっという間に途絶える」。²⁷ 途絶えなくするためには、「里山とメカイを守ろう」という意識、そして、それを行動に移すことが大事だと思う。ただ思想として「こうなればいい」「ああなればもっとよくなる」と考えていても、アクション（動作・活動）がないため、何も進まずに絶えてしまう。つまり、「何もしていない」状態にほぼ等しい。だから、まず行動することが大切だと思う。具体的には、保存普及会を立ち上げたり、それができなくても一人または有志が集まってメカイを作ったり、授業のプレゼンテーションでメカイを紹介したりできると思う。保存普及会を立ち上げなくても、会に参加したり、会のイベントで体験したりできると思う。

逆に、会ができることとして、八王子由木メカイの会と多摩めかいの会と宇津貫みどりの会が合同で「南多摩メカイ・サミット」というような講義・体験イベントを開いたらどうだろうか。すでに、これらの会どうしで交流は行っているそうだが、²⁸ 合同でイベントを開いて一般の人にメカイ文化を伝えれば、いろいろな地域の人が集まってメカイを紹介できると思う。

ところで、里山農業クラブはもう一つ、大きな問題を抱えている。メンバーの高齢化だ。

里山農業クラブは高齢化のため、近い将来米作りを止め、ゆぎのら（注：団体名）に引き継ぐ予定です（中略）田んぼの学校は昨年（注：2022 年）で閉校しましたが、代わって、ゆぎのらが我々の米作りの田んぼで里山学校を開きます。²⁹

里山農業クラブの米作りは 2025 年で終了し、ゆぎのらに引き継いでもらう予定としています。³⁰

（注：本来なら）里山農業クラブ名で（注：メカイを文化財として）申請すべきですが、我々の米作り等の里山活動を継承する団体（注：ゆぎのら）ができましたので、里山農業クラブはいずれ解散する予定です。そうすると（注：保存団体の）変更手続きが面倒となります。そこで、これからは、東京都全域での活動も必要になりますので、八王子市民・都民からもメカイ活動をしていることが分かり易く、かつ地元名を入れた名称（注：八王子由木メカイの会）としました。³¹

このように、里山農業クラブは、「ゆぎのら」にバトンタッチする予定であるようだ。しかし、これは悲しいことではなく、里山を守るリレーで、バトンが次の世代に渡されたことを意味している。里山保全リレーは、未来に向かって走り続けているのだ。

もちろん、八王子由木メカイの会も、日々前進している。『女性の担い手が存続のカギ』と、自身（注：塩谷さん）の他に若手の女性も共同代表に就任した」³² そうだ。『タウンニュース八王子版』（2023年4月13日号）に次の記載がある。

同会（注：八王子由木メカイの会）共同代表の一人である鈴木砂織さん（50）は、同クラブ（注：里山農業クラブ）に参加する中で初めてこの文化を知った。市内出身の夫はメカイを知っており、今鈴木さんが使っているメカイ包丁は、夫の祖母が使っていたもの。「（自分は八王子出身ではないが）伝承活動の一助になれば」と製作に携わっている鈴木さん。年に数回、メカイを観光地などで販売する機会があり、「買いに来てくださるお客さんとメカイを通して交流できるのが楽しい」と目を細めた。

2023年の八王子環境フェスティバルの会場で、ぼくに声がけしてくださった（「はじめに」を参照）のは、鈴木さんだったのかもしれない。

9月末からは全員揃っての新しいシーズンの活動が本格的に開始されます。³³

機会があれば、八王子由木メカイの会の方々が、宮嶽谷戸で、実際にメカイを作っておられる様子を見てみたい。



メカイ（2023年7月31日 長池公園自然館で撮影）

あとがき

この研究では、里山農業クラブ代表・八王子由木メカイの会共同代表の塩谷暢生さんが様々な資料をくださり、質問に答えてくださいました。大変貴重な情報を提供していただき、ありがとうございます。

里山農業クラブ幹事・八王子由木メカイの会共同代表の柚木駿一さんは、メカイ作りの活動は休止となる真夏に、わざわざ長池公園でシノ刈りとヘネ作りなどの実演をしてくださいました。また、メカイや里山について、いろいろ教えてくださいました。柚木さんが長池公園で実演してくださった 2023 年 7 月 31 日の八王子の最高気温は 36.9℃でした。暑い中、熱心に実演していただき、ありがとうございます。

また、八王子由木メカイの会の会員の方々は、八王子環境フェスティバルの会場でソコフミの仕方を教えてくださいました。メカイの作り方の情報を書く時に、大変役立ちました。ありがとうございます。

この研究ができたのは、塩谷さんと柚木さんのお二人をはじめ、八王子由木メカイの会の方々のおかげです。

メカイについて書かれた資料をいろいろ読んで、メカイ 1 つでもたくさんの視点から情報が記録されていることがわかりました。メカイの作り方、メカイの種類、メカイの歴史、材料のシノ、里山、メカイを作った人々の生活、メカイの保存団体など、様々な視点からメカイについての情報を得ました。1 つに視点を絞らず、多くの観点から情報を集めて、考えることで、とても充実した研究になるのだと思います。ただ集めるだけでなく、「様々な視点」から自分の意見を述べるのが大切だと思います。そして、初めてこの研究ができたのだと実感しました。

伝説が残る長池公園やみなみ野の「ふるさと資料室」を訪問し、実際にシノの藪を見たり、ヘネを作るところを見たり、メカイ作品を見て、本やインターネットで調べるだけでなく、現地に行って、生で見て、聞いて、当事者の考えや気持ちを知ることが大切なのだと思います。例えば、長池公園で柚木さんは、「最近ではビニールひもで作られることもある」とおっしゃいました。それがどのようなものなのかは、「ふるさと資料館」で実物を見るまで、想像もつきませんでした。また、シノがどのようなかたちで生息しているのか、実際に、どのようにヘネを作っていくのかは、目の前で見ないとわかりません。写真で、シノが群生しているところを見ると、たくさんシノが生えていそうだな、と感じましたが、実際に見てみると、とても写真に収まりきれないくらい、たくさん生えていました。ヘネの作り方やメカイの編み方は、本やインターネットに写真や動画、文章で説明されていますが、実際に見ると、「メカイはすぐに簡単に作れる」わけではなく、むしろ、「たくさん練習して、慣れていかないと、上達できない」ことがよくわかりました。

本やインターネットで得た情報を出発点にして、それが本当かどうかを確かめるために実際に調査したこと、メカイを作っている方々の考えや気持ちを知ることができたこと、メカイの保存に対して、どのような課題があるのかなどを、生で知ることができたことが楽しかったです。

この研究を読んでくださった方もメカイに興味を持ってくださればうれしいです。

2023 年 9 月
中本 慧（あきら）

注

■はじめに

1 八王子環境フェスティバルは、八王子環境フェスティバル実行委員会主催の、「はちおうじの環境をみる・きく・考える」イベントだ（東京たま未来メッセ（東京都立多摩産業交流センター）の公式サイトによる）。2022年6月5日、2023年6月4日に開催された。毎年6月の「環境月間」に行われる。1972年6月5日から16日まで、スウェーデンのストックホルムで国連人間環境会議が行われていたことを記念した月間だ。日本の提案を受けて、国連は6月5日を「世界環境デー」と定めた。

環境フェスティバルの目的は「多くの方々に環境の保全についての関心と理解を深めていただくとともに、積極的に環境保全活動に参加する意欲を高め」ることである（八王子市公式サイト「【開催終了】2023 八王子環境フェスティバル」）。

里山農業クラブ・八王子由木メカイの会が八王子環境フェスティバルに参加したのは2023年度が2回目だそう（「里山農業クラブ第141号」による）。

八王子由木メカイの会は、活動の拠点である里山の保全のために、環境フェスティバルに出展したのだと思う。できるだけ多くの人に、メカイを通じて、積極的に環境保全活動に参加してもらいたいのだろう。ただ、見せて、説明するだけでは、なかなか興味がわかなかったり、理解しにくかったりするかもしれないので、体験会も行ったのだと思う。

また、「里山農業クラブ 第139号」には、「今後はいっそうの普及啓発活動が期待され」と書かれている。さらに、「里山農業クラブ 第141号」には、「メカイ作りは単に文化財を保存継承する活動ではありません。原点は里山を荒らすシノの活用にありますので、メカイ作りは環境保全活動でもあるのです。」と書かれている。このことについては、第4章と第9章で取り上げる。

2 （東京都教育委員会）地域教育支援部「令和4年度東京都指定文化財の指定について」

3 八王子市プレスリリース『「南多摩のメカイ製作技術」が都の無形民俗文化財に！』

■第1章 メカイとは何か

1 『新八王子市史 民俗編』p.131。「籠」は「かご」、「箆」は「ざる」と読む。

2 松田操・近藤茂「メケエつくり」p.72

3 ここでは『メカイの作り方』と『多摩市史 民俗編』（以下、『多摩市史』と略す）を参考にする。

4 「ECO ネット東京 62」による。「宇津貫では敷ふみと呼んでいる。」『メカイの作り方』（p.25）

5 「メカイの胴部（カラダともいう）」『メカイの作り方』p.27。「メケエつくり」（p.97）では「ヨコマワシの作業で出来上がった胴の名称のことをカラダという」と書かれている。

6 『メカイの作り方』では「身（肉部）」（p.9）、「メケエつくり」では「実」（p.99）と表記されている。

7 かつては力が必要な作業は男性が行っていた。第2章 3. を参照。

8 『メカイの作り方』p.26

9 『八王子市史叢書 5 八王子写真民俗誌』p.194

10 ここでは『新八王子市史 民俗編』（主に p.134）と『多摩市史』を参考にした。

11 「メケエつくり」では「ザクモノ」（p.82）と表記されている。

12 『多摩市史』p.165

13 『多摩市史』p.171

14 13と同じ。

15 蚕に濡れた桑の葉を与えると病気になることがあるので、米作りの過程で出た糠殻を灰にして、良質の乾燥剤を作った。（「養蚕 長久手の民俗資料からみえてきた明治・大正・昭和のながくて」による。）長谷部晃『記録写真 養蚕のいま』（p. 14）に、蚕が「眠に入ると焼きぬか石灰をまいて蚕台を乾燥させ」ている写真が掲載されている。

16 蚕座ともいう。「蚕を飼う場所。蚕箔の上に紙（蚕座紙）を敷いたもの」『広辞苑 第七版』

17 『新八王子市史 民俗編』p. 135

18 東京都教育委員会「東京都文化財保護審議会の答申について」および由木地区環境市民会議「里地里山／里地里山の文化；メカイ製作技術が東京都指定無形民俗文化財（民俗技術）に指定」による。

■第2章 メカイの歴史

1 『新八王子市史 由木の民俗』p. 107。『みなみ野シティのツール』（p. 24）には「やがて子守り奉公などによって片倉や打越（注：現在の八王子市片倉町、打越町）に広が」ったと書かれている。

2 『多摩市史』p. 160

3 『新八王子市史 民俗編』p. 131

4 『メカイの作り方』p. 25

5 3と同じ。

6 稲城市の「文化財ノート No. 58 めかい」には、「大正時代後期頃に、由木村や多摩村から嫁に來た人たちにより、稲城市域に伝わったのではないかと思います」と書かれている。

7 篠田真理子他「多摩地域におけるめかいづくりの継承・活用に関わる基礎研究（その3）」p. 137。なお、メカイの材料となるシノを求めて、八王子の西に位置する津久井（現在の神奈川県相模原市）まで出かけたということについては、第3章3. を参照。

8 坪郷英彦「関東地域多摩丘陵における目籠編みの現在－多摩ニュータウン計画以後を中心として－」（p. 20）の「図5 目籠編み技術の伝播」を参考にした。

9 『多摩市史 通史編二 近現代』p. 373「表 1-7-12 手工業生産額」による。

10 「メケエつくり」p. 75

11 谷本寿男 他「多摩地域におけるめかいづくりの継承・活用に関わる基礎研究」p. 66－p. 67

12 『新八王子市史 由木の民俗』p. 109

13 『新八王子市史 民俗編』p. 135。「めかい資料館」は、かつてメカイの仲買人をしてきた小谷田英一氏の息子である小谷田孝之氏が、自宅（八王子市東中野）の庭に様々な種類のメカイやメカイに関連する資料を展示するために建設したものである（谷本寿男 他「多摩地域におけるめかいづくりの継承・活用に関わる基礎研究」p. 69－p. 70による）。この資料館は見学希望者に開放されているそうだが、今回の研究では訪問できなかった。

■第3章 メカイの材料

1 「シノタケ」と呼ばれることもある。『広辞苑 第七版』では「シノダケ」となっている。

2 環境省「生物多様性保全上重要な里地里山 選定地分布 東京都」

3 『牧野 新日本植物図鑑 改訂増補』p. 905

4 谷本寿男 他「多摩地域におけるめかいづくりの継承・活用に関わる基礎研究」p. 64

5 東京都環境局「植栽時における在来種選定ガイドライン」p. 4

- 6 「ECO ネット東京 62」
- 7 『タウンニュース八王子版』2023 年 4 月 6 日号、p. 3
- 8 2023 年 7 月 31 日に取材した。
- 9 例えば、『新八王子市史 民俗編』p. 131 の表題は「①竹細工（目籠）」となっている。
- 10 6 と同じ。
- 11 『古語大辞典』p. 1468。『メカイの作り方』（p. 26）には、「ヘネヘギ」とは「シノの皮を剥いで身を取り、ヘネを作る作業をいう。四つ割りしたシノのウラから指先で厚さと幅を調整しながら、折れないように剥ぐ（剥ぐ；ヘグまたはハグと読み、薄く削りとることをいう。由木では、ヘグというが、宇津貫ではヘネハギと呼んでいる）」と書かれている。
- 12 『古語大辞典』p. 1468
- 13 『新八王子市史 由木の民俗』p. 112
- 14 谷本寿男 他「多摩地域におけるめかいづくりの継承・活用に関わる基礎研究」p. 73
- 15 『新八王子市史 由木の民俗』p. 111
- 16 以上は『多摩市史』p. 166 – p. 167 による。
- 17 谷本寿男 他「多摩地域におけるめかいづくりの継承・活用に関わる基礎研究(その 2)」p. 59
- 18 17 と同じ。
- 19 17 と同じ。
- 20 17 と同じ。

■コラム パンダ

- 1 『教科で学ぶパンダ学』（p. 41）による。

■第 4 章 里山農業クラブと八王子由木メカイの会の活動

- 1 『新八王子市史 由木の民俗』p. 50 – p. 51 を参考にした。
- 2 『新八王子市史 由木の民俗』p. 50
- 3 2 と同じ。
- 4 『新八王子市史 由木の民俗』p. 51
- 5 「多摩ニュータウンの開発で第 19 住区にあたる堀之内エリアは、さまざまな理由で開発保留区域となり、荒れたままの 30 数年を重ねてきました。」「もしもし web」
- 6 『新八王子市史 由木の民俗』p. 51 – p. 55 を参考にした。
- 7 東京都環境局「47 八王子里山保全地域」
- 8 東京都環境局「保全地域の指定状況」
- 9 八王子コミュニティ活動応援サイト「はちコミねっと 里山農業クラブ」、『新八王子市史 由木の民俗』p. 51、『もしもし』2023 年 6 月 16 日号による。
- 10 内閣府 NPO ホームページ「NPO のイロハ」
- 11 10 と同じ。
- 12 『新八王子市史 由木の民俗』p. 51
- 13 12 と同じ。
- 14 『新八王子市史 由木の民俗』p. 51 – p. 52
- 15 『新八王子市史 由木の民俗』p. 52
- 16 15 と同じ。
- 17 「田んぼの学校」については第 9 章を参照。
- 18 『広辞苑 第七版』
- 19 18 と同じ。

- 20 「ECO ネット東京 62」なお、里山農業クラブによるメカイ作りは『広報はちおうじ』2007年12月1日号 (p. 16) でも紹介されている。
- 21 「ECO ネット東京 62」には次の記載がある。「メカイづくりの保存・普及活動は里山農業クラブの大切な活動なのである。さらに国の文化財指定（選択無形民俗文化財・民俗技術）という大きな目標も掲げているという。」「メカイの作り方」(p. 1) にも「国の選択無形民俗文化財（民俗技術）指定を目指して活動している」と書かれている。
- 22 「里山農業クラブ 第 141 号」。『メカイの作り方』では「2002 年から会員のメカイ作り経験者を講師に(注: して)有志を募ってメカイ教室を開」(p. 1) いたと書かれている。外部から講師を招いたのではない。
- 23 2023 年 8 月 31 日付の塩谷さんからのメールによる。
- 24 23 と同じ。
- 25 「里山農業クラブ 第 141 号」

■コラム 資源循環型農業

- 1 農畜産業振興機構「“資源循環型農業”ってなあに？」
- 2 1 と同じ。
- 3 磯沼ミルクファームの公式サイトによる。
- 4 農林水産省「エコフィードについて」
- 5 シノの使わなかった部分について、『多摩市史』(p. 45) では「篠竹の先の方は、切って燃料に使った」と書かれている。
- 6 「エコセメント事業は、焼却灰をセメントの原料としてリサイクルしています。八王子市の清掃工場で焼却されて残った灰は、エコセメント化施設へ運ばれてエコセメントになりリサイクルされています。」八王子市公式サイト「東京たま広域資源循環組合」
- 7 柚木さんによると、同じメカイを数十年間台所で使っている人もいるそうだ。(2023 年 7 月 31 日、柚木さんへの取材による)
- 8 「ECO ネット東京 62」および『メカイの作り方』p. 1

■第 5 章 宇津貫のメカイ

- 1 中西進「はじめに」『めかご ～八王子市宇津貫町における「目籠づくり」の現状調査～』（ページ番号は書かれていない）。なお、宇津貫では、「メカイ」という用語より、「めかご」という用語のほうがよく用いられている。
- 2 『めかご』(p. 2) による。この段落の以下の記述も『めかご』(p. 2) による。
- 3 『めかご』p. 2
- 4 『めかご』p. 5
- 5 『はちとぴ』2021 年 12 月 23 日号。この記述は『めかご』p. 5 の記述を元になっている。
- 6 『めかご』p. 8
- 7 「私と目籠一聞き書きを中心として」『めかご』p. 34 – p. 37
- 8 『めかご』p. 34
- 9 8 と同じ。
- 10 8 と同じ。
- 11 「剥いだばかりのへネの両側縁は刃物の刃のように鋭く、このまま用いると手などを切り、危険である。そこで、何本かのへネをまとめ、両手にはさみ、へネ全体をもみ、両側縁をまるめる。この作業をへネモミという。」「メケエつくり」(p. 93) おそらく、へネモミをしてもなお、へネは堅くて衣服を傷つけることがあったのだろう。

- 12 8と同じ。第8章で述べる取材では、柚木さんはズボンが破れないようにするため、小さなマットを使用していた（第8章の写真を参照）。
- 13 8と同じ。
- 14 8と同じ。「宇津貫の赤ん坊はへねへねと泣く」（『めかご』p. 16）と言われるぐらい、宇津貫ではメカイ作りが盛んだった。
- 15 『めかご』（p. 3）による。この段落の以下の記述も『めかご』（p. 3 および p. 5）による。
- 16 『めかご』p. 3
- 17 16と同じ。
- 18 1と同じ。この段落の以下の記述も「はじめに」による。
- 19 1と同じ。
- 20 1と同じ。
- 21 1と同じ。
- 22 「宇津貫みどりの会 第104号」による。以下の内容もこの会報による。
- 23 22と同じ。
- 24 22と同じ。宇津貫みどりの会のパンフレットによると、宇津貫緑地では「2012年に新種として認定された『ハチオウジアザミ』等、多くの動植物が確認されている」。
- 25 「宇津貫みどりの会 第104号」p. 3
- 26 属 雄二「宇津貫あれこれ 12. めかご」
- 27 「ふるさと資料室」のパネルによる。2015年2月5日にも同様の体験会が行われたようだ（第6章2.を参照）。
- 28 ふるさと資料室のパネルでは、「ふるさと資料室では街の歴史を学んで頂くために、宇津貫町の副業としてのめかごの説明や、編み方の指導を行っています。」と書かれていて、ふるさと資料室として実施したようだ。
- 29 「由井地区『ふるさと資料館』建設推進委員会」も「目籠講習会」などを開催した。『めかご』（p. 38 – p. 40）にその記録が掲載されている。「本物を見ていただくために、生の篠を使用し、篠割り、へねはぎからはじめ（た）（中略）一般の方のためには荷造り用のテープを用意した」（p. 38）、「今後も折りをみて体験学習会を開き、めかご作りの底辺を広くしていかなければならない。それには会の内部で講師格の人員を育成すること、適切な広報活動、より良い材料の調達など課題は多い」（p. 40）と書かれていて、技術の伝達の必要性和難しさに苦労しておられる様子がわかる（第9章も参照）。
- 30 『はちとび』2021年12月23日号には、「（注：ふるさと資料室の）事務室に事前に問い合わせると、毎月第3土曜日の午後1時から、めかごづくり体験ができます（現在は新型コロナウイルス感染症対策のため活動休止中）。」と書かれている。2023年9月4日に由井市民センターみなみ野分館に電話で問い合わせたところ、引き続き休止中とのことである。再開するかもしれないが、再開時期は未定とのことである。
- 31 26と同じ。

■第6章 多摩のメカイ

- 1 「メケエつくり」p. 77
- 2 『多摩市史』p. 160
- 3 『多摩市史』p. 161。なお、『八王子の民俗』（p. 44）では「東組は宇津貫を中心としたもの（中略）西組は、当時の由木村や多摩村の仲買人たちであろう」と書かれていて、東西が逆になっている。『多摩市史』の記述が正しいと思う。
- 4 『多摩市史』p. 161。『多摩町史』の記載内容も『多摩市史』による。
- 5 『多摩市史』p. 161 – p. 162

- 6 『多摩市史』 p. 163。『多摩町史』の記載内容も『多摩市史』による。
- 7 2と同じ。
- 8 多摩市公式サイト「『南多摩のメカイ製作技術』が『東京都指定無形民俗文化財（民俗技術）』に指定されました！」
- 9 2023年7月31日、柚木さんへの取材による。
- 10 たま TOWN TIP「多摩めかいの会」
- 11 多摩市市民活動情報検索サイト「多摩めかいの会」
- 12 11と同じ。
- 13 たま TOWN TIP「多摩めかいの会」の「多摩めかいの会のイベント」
- 14 たま TOWN TIP「多摩めかいの会」の「多摩めかいの会の『7月15日多摩中学校伝承文化継承会』」
- 15 『タウンニュース多摩版』2023年4月13日号。以下の岡野さんの引用もこの号による。
- 16 多摩市公式サイト「多摩ふるさと資料館（施設案内）」による。今回の研究では訪問できなかった。

■コラム 「多摩ニュータウン」の開発

- 1 「TAMA NEW TOWN SINCE 1965」 p. 1
- 2 『多摩市市制施行 50 周年記念誌』p. 80 による。以下の内容もこの資料に基づいている。
- 3 東洋経済オンライン 2022 年 2 月 18 日「ニュータウンの中心『多摩センター』と街の半世紀」
- 4 3と同じ。
- 5 3と同じ。
- 6 「鉄道用語の基礎知識 P 線方式」
- 7 3と同じ。
- 8 多摩都市モノレール公式サイト「事業概要」

■第7章 文化財指定基準について

- 1 「東京都文化財指定基準」および「令和4年度 東京都指定文化財の指定について」を参考にした。
- 2 「東京都文化座保護条例」の「第四章 都指定有形民俗文化財・都指定無形民俗文化財」

■第8章 メカイ作りの取材

- 1 この章のみ、文体を変えて、敬体で書きます。注も敬体で書きます。ヘネの太さや長さは、今回実演で使ったヘネの太さと長さです。この章の内容で間違いがあれば、それはぼくの間違いで、柚木さんの間違いではありません。
- 2 他に、『メカイの作り方』と『多摩市史』も参考にします。
- 3 長池公園と長池里山クラブについては、「コラム 長池公園」を参照。
- 4 第3章 1. も参照。
- 5 『メカイの作り方』(p. 5) には「シノのタケノコはアクが強過ぎるので通常、食用とはしない」と書かれています。
- 6 シノとは全く別の原因である「ナラ枯れ」は、八王子市の公式サイト「ナラ枯れ対策について」によると、「ナラ枯れは、コナラをはじめとしたナラ類や、シイ類・カシ類が主に感染する樹木の感染症です。体長5ミリメートルほどの『カシノナガキクイムシ』という

小さな昆虫が媒介する『ナラ菌』が樹木内部で繁殖することによって、樹木は水を吸い上げる機能を奪われて、起こる病気で、『ナラ菌』が繁殖した樹木は、気温が上昇する6月から8月頃に、急速に枯死してしまいうそうです。長池公園でもナラ枯れが発生していて、枯れた木が切り倒されていました（写真）。



ナラ枯れしたナラの木を切ったもの（2023年7月31日 長池公園で撮影）

- 7 『めかご』にも次のように書かれています。「篠は半日陰の場所に生えているものが良く、川辺や砂利間のものやあまり日当たりの良い場所のものは節が折れ易かったり、こわかったりで敬遠された。」(p. 19)「こわい（強い）」は「ごわごわしている。かたい。」(『広辞苑 第七版』) という意味だと思います。また、「ウラナリ」は「瓜などの蔓の末に実がなること。また、その実。小振りで、味も落ちる。」(『広辞苑 第七版』) という意味です。
- 8 「ミ」の名称については第1章 1. を参照。柚木さんは「肉」とおっしゃっていました。
- 9 「縁巻き用の太いシノは日当たりの良い所にしか生えない。」『メカイの作り方』 p. 10
- 10 『多摩市史』 p. 168。『メカイの作り方』(p. 19) では「柄の長い桑切り鎌」と書かれています。
- 11 「シノを切るにはシノキリガマ（クワキリガマともいう）を使い、切り口がなるべく平らになるように根元のほうから切る。切り株が斜めになっていると、誤って足を踏みはずした時に危険だからである。」(「メケエつくり」 p. 98 – p. 99)
- 12 『メカイの作り方』 p. 14。『八王子の民俗』(p. 45) では「古くなった篠竹は、一晩くらい水につけて使った。」と書かれています。
- 13 年間を通してメカイを作っていた人もいたことについては、第2章の2. を参照。
- 14 「メケエつくり」 p. 103
- 15 「メケエつくり」 p. 103 – p. 104
- 16 『新八王子市史 由木の民俗』 p. 112
- 17 底面の部分は「シキ又はソコと呼ばれ」る。『多摩市史』 p. 165
- 18 第1章の注4を参照。
- 19 「メケエつくり」 p. 72
- 20 『新八王子市史 由木の民俗』では「ヘイだ残りの肉の部分をはネッカスという。」(p. 113) と書かれています。
- 21 『新八王子市史 由木の民俗』 p. 113
- 22 「節に凸（山）が1つあるのが孟宗竹、2つあるのが真竹である。（中略）一般に孟宗竹は太くて肉厚で加工が難しく、真竹は細く肉が薄いので細工し易い。」(『メカイの作り方』 p. 6)
- 23 「ケツマキ」ともいいます。(「メケエつくり」 p. 97、『多摩市史』 p. 165)
- 24 ぼくが通った八王子市立山田小学校では、5年生の時、バケツ稲を育てていました。

■コラム 長池公園

- 1 「里山文化の継承と創造 八王子市長池公園」
- 2 「碑・石碑 浄瑠璃姫の碑」を参考にした。
- 3 2と同じ。

- 4 「長池公園概要」を参考にした。
- 5 「長池公園概要」 p. 1
- 6 新宿観光振興協会「おすすめスポット 四谷見附橋」
- 7 「里山文化の継承と創造 八王子市長池公園」
- 8 「長池里山クラブ」公式サイト

■第9章 メカイの今後

- 1 「里山農業クラブ 第139号」
- 2 2023年7月31日、柚木さんへの取材による。取り消しについては第7章を参照。
- 3 1と同じ。
- 4 例えば、2023年2月24日に、八王子市立別所小学校で「メカイ製作実演会」が開催されている（「はちコミねっと 里山農業クラブ」2023年2月24日）。「今回は、50分の短い時間で見て、触るだけ実演会でしたが、いつかきっと自分の手で『メカイ』に挑戦してくださいね。」と書かれている。また、市民向けの講座としては、新型コロナウイルス感染症が拡大したためしばらく開催されていなかった「南大沢生涯学習センター主催の市民講座『由木の里のめかい』（2022年11月20日開催）」に、八王子由木メカイの会から講師を派遣している（「はちコミねっと 里山農業クラブ」2022年11月20日）。『メカイの作り方』には「上手下手は別にして編むことは子供でも出来る」（p. 1）と書かれている。
- 5 『メカイの作り方』 p. 6
- 6 5と同じ。
- 7 2023年8月21日付のメールによる。柚木さんも（1）と（2）の全工程がメカイ製作技術であるとおっしゃっている（2023年8月19日付のメールによる）。
- 8 『メカイの作り方』 p. 1
- 9 『メカイの作り方』 p. 13
- 10 『メカイの作り方』 p. 10
- 11 2023年7月31日、柚木さんへの取材による。
- 12 「はちコミねっと 里山農業クラブ」2017年6月18日、2022年11月1日最終更新日
- 13 八王子由木メカイの会のパンフレット「メカイ製作技術を残し、普及する活動に参加しませんか。」による。
- 14 八王子市公式サイト「八王子車人形」
- 15 文化庁「日本遺産ポータルサイト 申請にあたって」
- 16 2023年7月26日に、八王子市役所の文化財課・日本遺産推進担当の方に電話で問い合わせたときの回答による。
- 17 11と同じ。
- 18 13と同じ。
- 19 「ウチワイレ・ウチワオキは関戸地区に住む人が考案し昭和三十年ころ専売特許を受けたもので、団扇（注：うちわ）を入れておくものである。』『多摩市史』p. 174。かつて、専売特許を取ったメカイもあったのである。
- 20 八王子由木メカイの会のパンフレット「メカイ製作技術を残し、普及する活動に参加しませんか。」でも、活動内容として「新製品開発」が含まれている。
- 21 塩谷さんからの2023年8月21日付のメールによる。
- 22 柚木さんからの2023年8月19日付のメールによる。
- 23 2022年8月11日に、八王子市生涯学習センター（クリエイトホール）で開催された。
- 24 八王子車人形 西川古柳座公式サイト「座員紹介 西川古柳」による。
- 25 「里山農業クラブ 第141号」
- 26 「ECO ネット東京 62」

- 27 『タウンニュース八王子版』2023年4月6日号、p. 3
 28 11と同じ。
 29 「里山農業クラブ 第139号」
 30 「里山農業クラブ 第141号」
 31 塩谷さんからの2023年8月31日付のメールによる。
 32 27と同じ。
 33 22と同じ。『広報はちおうじ』2023年9月15日号 (p. 4) によると、2023年9月30日と10月1日の2日間「南大沢総合センターまつり」が開催され、「生涯学習センター南大沢分館」で「由木の里のめかい～篠竹を編んで伝統工芸のかごの実演販売」が行われる。

*表紙写真: 八王子由木メカイの会のメンバーが製作したメカイ (長池公園自然館の売店で購入)

*本文で使用した写真は、すべてぼくの父が撮影したものです。

引用文献

*図書館はいずれも八王子市立図書館

「磯沼ミルクファーム」

<https://www.isonuma-milk.com/blank-1>

2023年8月15日閲覧

稲城市教育委員会生涯学習課 (2007) 「文化財ノート No. 58 めかい」

https://www.city.inagi.tokyo.jp/kanko/rekishi/bunkazai_note.files/MeKAi.pdf

2023年7月16日閲覧

稲葉茂勝 (2017) 『教科で学ぶパンダ学 歴史 地理 政治 経済 生物 自然 環境 雑学』
 今人舎

中央図書館・南大沢図書館 489/イ

上野動物園「上野動物園のジャイアントパンダ情報サイト」「パンダ大百科 Q4: ジャイアントパンダはタケ・ササしか食べないの？」

<https://www.ueno-panda.jp/dictionary/answer04.html>

2023年9月9日閲覧

宇津貫みどりの会 (2007) 『みなみ野シティのルーツ 宇津貫・片倉 谷戸の暮らし』八王子
 宇津貫みどりの会

中央図書館 021-20 B/ウ、および 生涯学習センター図書館 郷土 021-291/ウ

「宇津貫みどりの会 第104号」2023年5月発行

<https://utsunukimidori.ie-yasu.com/kaiho104.pdf>

2023年9月3日閲覧

「宇津貫みどりの会」公式サイト

<https://utsunukimidori.ie-yasu.com/>

最終更新日 2023年8月25日、2023年9月3日閲覧

「宇津貫みどりの会」パンフレット

2023 年 6 月 4 日に、八王子環境フェスティバル会場でいただいた。

オール東京 62 市区町村共同事業 みどり東京・温暖化防止プロジェクト「ECO ネット東京 62 第 90 回 メカイづくりでシノダケを利用して篠竹の増殖を防ぎ、山里の耕地を守る（里山農業クラブ）」2017 年 11 月 27 日付

<https://all62.jp/ecoreport/90/01.html>／<https://all62.jp/ecoreport/90/02.html>

2023 年 7 月 28 日閲覧

環境省「生物多様性保全上重要な里地里山 選定地分布 東京都」

https://www.env.go.jp/nature/satoyama/13_tokyo/tokyo.html

2023 年 8 月 4 日閲覧

佐竹義鋪 他 (1989)『日本の野生植物 木本Ⅱ』平凡社

南大沢図書館 参考 472.1／ニ

佐藤 広 (1995)『八王子の民俗』揺籃社

川口図書館 郷土 21-38／サ

里山農業クラブ・八王子由木メカイの会「里山農業クラブ 第 139 号」、2023 年 3 月 1 日
この資料は里山農業クラブ代表の塩谷暢生さんからいただいた。

里山農業クラブ・八王子由木メカイの会「里山農業クラブ 第 140 号」、2023 年 5 月 1 日
この資料は里山農業クラブ代表の塩谷暢生さんからいただいた。

里山農業クラブ・八王子由木メカイの会「里山農業クラブ 第 141 号」、2023 年 7 月 1 日
この資料は里山農業クラブ代表の塩谷暢生さんからいただいた。

里山農業クラブ メカイ保存普及会 (2019)『メカイの作り方』私家版

由井市民センターみなみ野図書館 郷土 021-75／サ

「里山文化の継承と創造 八王子市長池公園」

<https://www.h-yugi.org/nagaikepark>

2023 年 8 月 3 日閲覧

篠田真理子 他 (2013)「多摩地域におけるめかいづくりの継承・活用に関わる基礎研究（その 3）」『恵泉女学園大学園芸文化研究所報告 園芸文化』第 9 号 p. 135 - p. 160

https://keisen.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=controlnumber&search_type=2&q=5

2023 年 8 月 8 日閲覧

新宿観光振興協会「おすすめスポット 四谷見附橋」

https://www.kanko-shinjuku.jp/spot/kw-%E5%9B%9B%E8%B0%B7/article_397.html

2023 年 8 月 3 日閲覧

新村 出 (2018)『広辞苑 第七版』岩波書店

川口図書館 参考 813.1／コ、および自宅にあるもの

属 雄二「宇津貫あれこれ 12. めかご」

<https://utsunukimidori.ie-yasu.com/diary11.html>

2023 年 9 月 3 日閲覧

タウンニュース社「多摩の竹籠技術、文化財に継承 団体も都から認定」『タウンニュース多摩版』2023 年 4 月 13 日号

<https://www.townnews.co.jp/0306/2023/04/13/673491.html>

2023 年 7 月 28 日閲覧

タウンニュース社「竹かご製作技術都の無形民俗文化財に八王子から保存会 認定へ」『タウンニュース八王子版』2023 年 3 月 23 日号

<https://www.townnews.co.jp/0305/2023/03/23/670118.html>

2023 年 7 月 28 日閲覧

タウンニュース社「人物風土記 文化、絶やすのはたやすい」『タウンニュース八王子版』2023 年 4 月 6 日号、p. 3

この資料は里山農業クラブ代表の塩谷暢生さんからいただいた。

タウンニュース社「かつて一大産業だった南多摩・メカイ製作技術」『タウンニュース八王子版』2023 年 4 月 13 日号

<https://www.townnews.co.jp/0305/2023/04/13/673454.html>

2023 年 8 月 30 日閲覧

谷本寿男 他 (2010) 「多摩地域におけるめかいづくりの継承・活用に関わる基礎研究」『恵泉女学園大学園芸文化研究所報告 園芸文化』第 7 号 p. 62 – p. 102

https://keisen.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=controlnumber&search_type=2&q=26

2023 年 8 月 8 日閲覧

谷本寿男 他 (2011) 「多摩地域におけるめかいづくりの継承・活用に関わる基礎研究 (その 2)」『恵泉女学園大学園芸文化研究所報告 園芸文化』第 8 号 p. 46 – p. 102

https://keisen.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=20&sort=controlnumber&search_type=2&q=27

2023 年 8 月 8 日閲覧

多摩市 (2021) 「第 4 章 多摩市の歴史 (多摩ニュータウン開発から)」『多摩市市制施行 50 周年記念誌』p. 77 – p. 108

https://www.city.tama.lg.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/004/116/4-1.pdf

2023 年 7 月 22 日閲覧

多摩市公式サイト「多摩ふるさと資料館 (施設案内)」

<https://www.city.tama.lg.jp/kenkofukushi/1008238/1008143/1010474/1010478/1004087.html>

最終更新日 2023 年 5 月 8 日、2023 年 9 月 7 日閲覧

多摩市公式サイト「『南多摩のメカイ製作技術』が『東京都指定無形民俗文化財(民俗技術)』に指定されました！」

<https://www.city.tama.lg.jp/kenkofukushi/1008238/1008143/1011373.html>

最終更新日 2023 年 5 月 17 日、2023 年 7 月 28 日閲覧

多摩市史編集委員会 (1997)『多摩市史 民俗編』多摩市
南大沢図書館 参考 023-20／タ

多摩市史編集委員会 (1999)『多摩市史 通史編二 近現代』多摩市
<https://adeac.jp/lib-city-tama/text-list/d100020/ht011830>
2023 年 7 月 20 日閲覧

多摩市市民活動情報検索サイト「多摩めかいの会」
<https://www.tama-shimin-katsudo.com/htm/org/detail.asp?id=4000034>
2023 年 9 月 6 日閲覧

たま TOWN TIP「多摩めかいの会」
<https://towntip.jp/tama/sns/community.php?bbs%20id=746>
2023 年 9 月 6 日閲覧

多摩町誌編さん委員会 (1970)『多摩町誌』多摩町役場
川口図書館 郷土 23-20／タ

多摩都市モノレール公式サイト「事業概要」
<https://www.tama-monorail.co.jp/company/outline.html>
2023 年 9 月 7 日閲覧

坪郷英彦 (2019)「関東地域多摩丘陵における目籠編みの現在 ―多摩ニュータウン計画以後を中心として―」山口大学人文学部異文化交流研究施設『異文化研究 13』p. 15 – p. 30
<https://petit.lib.yamaguchi-u.ac.jp/27735>
2023 年 8 月 8 日閲覧

「鉄道用語の基礎知識 鉄道法規編 (RLAW)」
<https://www.wdic.org/w/RAIL/P%E7%B7%9A%E6%96%B9%E5%BC%8F>
2023 年 7 月 24 日閲覧

東京たま未来メッセ(東京都立多摩産業交流センター)「2023 八王子環境フェスティバル」
<https://www.tamaskc.metro.tokyo.lg.jp/jastice-outside/event/110/detail.html>
2023 年 8 月 8 日閲覧

東京都環境局 (2014)「植栽時における在来種選定ガイドライン ～生物多様性に配慮した植栽を目指して～」
www.kankyo.metro.tokyo.lg.jp/nature/green/green_biodiv/ns_guidelines.files/ns_guidelines_all.pdf
2023 年 8 月 3 日閲覧

東京都環境局「47 八王子里山保全地域」
https://www.kankyo.metro.tokyo.lg.jp/nature/natural_environment/tokyo/area/47_horinouchi.html
2023 年 8 月 10 日閲覧

東京都環境局「保全地域の指定状況」

https://www.kankyo.metro.tokyo.lg.jp/nature/natural_environment/tokyo/area/index.html

2023 年 8 月 10 日閲覧

東京都教育委員会「東京都文化財保護審議会の答申について」2023 年 2 月 15 日

https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/press/press_release/2023/release20230215_01.html

2023 年 8 月 17 日閲覧

（東京都教育庁）地域教育支援部（2023）「第 14 号議案資料 令和 4 年度 東京都指定文化財の指定について」

2023 年 7 月 28 日閲覧

東京都教育庁地域教育支援部管理課「東京都指定無形民俗文化財（民俗技術）南多摩のメカイ製作技術」『東京の文化財』第 133 号、p. 3

生涯学習センター図書館で無料配布されていたもの

「東京都文化財指定基準」1977 年 1 月 14 日教育委員会告示第 2 号、2007 年 11 月 16 日施行

https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/static/reiki_int/reiki_honbun/g170RG00002144.html

2023 年 7 月 28 日閲覧

「東京都文化財保護条例」（1976 年 3 月 31 日制定、2006 年 4 月 1 日施行）

https://www.reiki.metro.tokyo.lg.jp/reiki/reiki_honbun/g101RG00002142.html?id=j4_k1#e000000516

2023 年 7 月 28 日閲覧

東洋経済オンライン 2022 年 2 月 18 日「ニュータウンの中心『多摩センター』と街の半世紀 入居開始時は『陸の孤島』、今は 3 路線が乗り入れ」

<https://toyokeizai.net/articles/-/512117?page=3>

2023 年 7 月 24 日閲覧

都市再生機構「TAMA NEW TOWN SINCE 1965」

https://www.ur-net.go.jp/toshisaisei/comp/lrmhph000000umro-att/tama_new_town_since1965.pdf

2023 年 7 月 24 日閲覧

内閣府 NPO ホームページ「NPO のイロハ」

<https://www.npo-homepage.go.jp/about/npo-kisochishiki/npoiroya#:~:text=NPO%E3%81%A8%E3%81%AF,%E3%81%97%E3%81%AA%E3%81%84%E5%9B%A3%E4%BD%93%E3%81%AE%E7%B7%8F%E7%A7%B0%E3%81%A7%E3%81%99%E3%80%82>

2023 年 8 月 10 日閲覧

長池公園自然館（2008）「長池公園概要」

https://fusion-nagaike.cocolog-nifty.com/file/20071013kouen_gaiyou.pdf

2023 年 8 月 3 日閲覧

「長池里山クラブ」公式サイト
<https://www.nagaike.info/index.html>
 2023 年 8 月 30 日閲覧

長久手市公式サイト「養蚕 長久手の民俗資料からみえてきた明治・大正・昭和のながくて」
<https://www.city.nagakute.lg.jp/soshiki/kurashibunkabu/shogaigakushuka/4/nagakutenorekisibunna/4737.html>
 最終更新日 2022 年 2 月 7 日、2023 年 8 月 13 日閲覧

中田祝夫 他編 (1983)『古語大辞典』小学館
 南大沢図書館 参考 813.6／コ

農畜産業振興機構「“資源循環型農業”ってなあに？」
https://www.alic.go.jp/koho/mng01_000044.html
 最終更新日 2015 年 1 月 6 日、2023 年 7 月 28 日閲覧

農林水産省「エコフィードについて」
https://www.maff.go.jp/j/chikusan/sinko/lin/l_siryu/ecofeed.html#:~:text=%E3%82%A8%E3%82%B3%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%BC%E3%83%89%E3%83%89%E3%81%A7%E9%87%8D%E8%A6%81%E3%81%AA%E5%8F%96%E7%B5%84%E3%81%A7%E3%81%99%E3%80%82
 2023 年 8 月 15 日閲覧

長谷部晃 (2007)『記録写真 養蚕のいま』新風舎
 川口図書館 630／ハ

「八王子車人形 西川古柳座」公式サイト
<https://www.hathiojikurumaningyo.com/>
 2023 年 9 月 3 日閲覧

八王子コミュニティ活動応援サイト「はちコミねっと 里山農業クラブ」
<https://hachikomi.genki365.net/G0000047/>
 2023 年 9 月 3 日閲覧

八王子市広聴広報室（広報担当）『広報はちおうじ』2007 年 12 月 1 日号
https://www.city.hachioji.tokyo.jp/contents/kouhou/006/p003442_d/fil/koho071201.pdf
 2023 年 9 月 11 日閲覧

八王子市都市戦略部広報プロモーション課『広報はちおうじ』2023 年 9 月 15 日号

八王子市公式サイト「【開催終了】2023 八王子環境フェスティバル」
https://www.city.hachioji.tokyo.jp/kurashi/life/004/013/kannkyou/p024401.html?_fsi=POTJMMrM
 最終更新日 2023 年 7 月 11 日、2023 年 8 月 8 日閲覧

八王子市公式サイト「東京たま広域資源循環組合」

<https://www.city.hachioji.tokyo.jp/kurashi/gomi/shisetujyoho/seisoshisetsujyoho/p020550.html>

最終更新日 2018 年 10 月 23 日、2023 年 8 月 18 日閲覧

八王子市公式サイト「ナラ枯れ対策について」

<https://www.city.hachioji.tokyo.jp/shisetsu/009/p032229.html>

最終更新日 2023 年 3 月 28 日、2023 年 8 月 4 日閲覧

八王子市公式サイト「八王子車人形」

<https://www.city.hachioji.tokyo.jp/kankobunka/003/003/006/kinisitei/p005234.html>

最終更新日 2023 年 4 月 6 日、2023 年 8 月 11 日閲覧

八王子市市史編集委員会 (2017)『新八王子市史 民俗編』八王子市
長池公園自然館ライブラリーコーナー

八王子市市史編集専門部会民俗部会 (2013)『新八王子市史民俗調査報告書 第2巻 八王子市
市東部地域 由木の民俗』八王子市総合政策部市史編さん室
生涯学習センター図書館 382.1／ハ

八王子市市史編集専門部会民俗部会 (2016)『八王子市史叢書 5 八王子写真民俗誌』
八王子市市史編さん室

長池公園自然館ライブラリーコーナー および 川口図書館 郷土 021-38／ハ

八王子市プレスリリース (2023 年 2 月 15 日)『「南多摩のメカイ製作技術」が都の無形
民俗文化財に!』

https://www.city.hachioji.tokyo.jp/shisei/001/001/009/001/p023092_d/fil/050215mekai.pdf

2023 年 7 月 28 日閲覧

八王子由木メカイの会「八王子育ち・東京都文化財の民俗技術 メカイ製作技術を残し、
普及する活動に参加しませんか。」パンフレット

2023 年 6 月 4 日に、八王子環境フェスティバル会場でいただいた。

「碑・石碑 浄瑠璃姫の碑」

<https://hachisan.michikusa.jp/61jyorurihime.html>

2023 年 8 月 4 日閲覧

「ひと休みコラム 農家の台所で重宝された民具『めかご』とは」『はちとぴ』2021 年 12 月
23 日号

<https://8dabe.com/2021/12/23/hachitopi-mekago/>

2023 年 7 月 27 日閲覧

文化庁「日本遺産ポータルサイト 申請にあたって」

<https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/about/application/>

2023 年 8 月 12 日閲覧

堀田 満 他 (1989)『世界有用植物事典』平凡社
南大沢図書館 参考 471.9／セ

牧野富太郎 (1989)『牧野 新日本植物図鑑 改訂増補』北隆館
生涯学習センター図書館 参考 470.3／マ

松田操・近藤茂 (1990)「メケエつくり」多摩市文化振興財団『雑木林と人々のくらし』
パルテノン多摩ミュージアム ライブラリー、p. 71 – p. 115
中央図書館 23-38

もしもし「田んぼやメカイ作りで里山環境の再生を」『もしもし』No. 1567、2023 年 6 月
16 日

この資料は里山農業クラブ代表の塩谷暢生さんからいただいた。

もしもし web「紙上 Placemaking『田んぼやメカイ作りで里山環境の再生を』／里山農業
クラブ 代表: 塩谷 暢生さん」

<https://mosimosi.biz/column/230602-1-stymng-club/>

2023 年 7 月 28 日閲覧

由井地区「ふるさと資料館」建設推進委員会 (1997)『めかごー八王子市宇津貫町における
「目籠づくり」の現状調査ー』由井地区「ふるさと資料館」建設推進委員会

中央図書館 21-75

由木地区環境市民会議「里地里山／里地里山の文化；メカイ製作技術が東京都指定無形
民俗文化財（民俗技術）に指定」

[https://sites.google.com/view/yugi-kankyo-](https://sites.google.com/view/yugi-kankyo-shiminkaigi/%E9%87%8C%E5%9C%B0%E9%87%8C%E5%B1%B1)

[shiminkaigi/%E9%87%8C%E5%9C%B0%E9%87%8C%E5%B1%B1](https://sites.google.com/view/yugi-kankyo-shiminkaigi/%E9%87%8C%E5%9C%B0%E9%87%8C%E5%B1%B1)

2023 年 8 月 8 日閲覧



八王子市 令和 5 年度

第7回 図書館を使った調べる学習コンクール 市長賞作品

- ・本書を無断で複写・複製することは禁止します
- ・本書は図書館振興財団令和 6 年度振興助成事業により作成しました

八王子市教育委員会

令和 6 年(2024 年)7 月